神並古墳群遺跡第3次発掘調査報告

1990．2

財団法人 東大阪市文化財協会

神並古墳群遺跡第３次発掘調査報告

1990．2

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市内に所在する埋蔵文化財包蔵地は百数十ヶ所を数え、包蔵地での土木・建築工事は毎年増加の一途をたどっております。工事に先だって緊急発掘調査も急増している状況にあります。

今回、神並古墳群遺跡で共同住宅建築工事が実施されることになり、これに先だって発掘調査をする運びとなりました。当遺跡周辺は、昭和61年に開通した近鉄東大阪線に近く、その便のよさから住宅建設が急増しております。

神並古墳群遺跡は古墳群と古墳以外の遺構を包括した遺跡であります。工事予定地は同古墳群内の一基である夫婦塚古墳に隣接した位置にあたります。調査では夫婦塚古墳の石室内より持ち出されたと考えられる須恵器、土師器、金属製品などが出土し、同古墳を考える上では貴重な資料を得ることができました。また、近世の遺構も見つかっております。しかし、今回の調査は、神並古墳群遺跡の一端を見たにすぎず、今後、発掘調査によってその全貌の解明に努力していきたいと思います。

最後に、調査および報告書作成にあたって御協力・御指導をいただいた方々に厚くお礼申し上げるとともに、本書が歴史研究をはじめ、広く活用されることを心から願うものであります。

平成２年２月

財団法人　東大阪市文化財協会
常務理事　塚　田　氏　秀

例　　言

1．本書は、株式会社富士住建が予定している共同住宅建設工事に伴って発掘調査を実施した神並古墳群遺跡第３次の調査報告書である。

2．現地調査および遺物整理は、財団法人東大阪市文化財協会が株式会社富士住建の委託を受け、現地調査を昭和64年１月６日～平成１年４月17日まで、遺物整理を平成１年４月18日～平成２年２月28日まで実施した。

3．調査・整理は次の事務局体制により進めた。

理事長　木寺　宏（東大阪市教育委員会教育長）平成１年10月まで
事務局長　寺澤　勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）平成１年５月まで
室田和彦（東大阪市教育委員会文化財課課長）平成１年５月より
庶務部長　下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主査）
調査部長　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶務部　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調査部　上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当　才原金弘（東大阪市教育委員会文化財課）
調査補助　廣瀬晴信　吉村達也　島村和宏　栄富也　別所秀高　辰野直樹　柴田敦司　阪口徳一　久井勇三　本田けい子　平井多美子　三浦一已　高橋祐子　牛島千恵子　西宮圭子

4．本書の執筆と編集は才原がおこなった。

5．図版に収めた遺構写真は才原と補助員が撮影し、遺物写真はスタジオ．Ｇ．Ｆ．プロに委託した。

6．調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に準じた。

本　文　目　次

はしがき
例言
Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．調査の概要……4
　1．調査の方法と地区割……4
　2．層位……4
　3．遺構……7
　4．出土遺物……10
Ⅳ．まとめ……23
観察表……25

挿　図　目　次

第1図　調査位置図……1
第2図　遺跡周辺図……3
第3図　A・B地区南壁断面実測図……5
第4図　A地区遺構実測図……7
第5図　B地区遺構実測図……9
第6図　土器実測図……11
第7図　土器実測図……12
第8図　土器実測図……14
第9図　土器実測図……15
第10図　土器実測図……17
第11図　土器実測図……18
第12図　土器実測図……19
第13図　土器実測図……20
第14図　埴輪拓影……21
第15図　装飾壺部品・装身具実測図……22
第16図　金属製品実測図……23

図　版　目　次

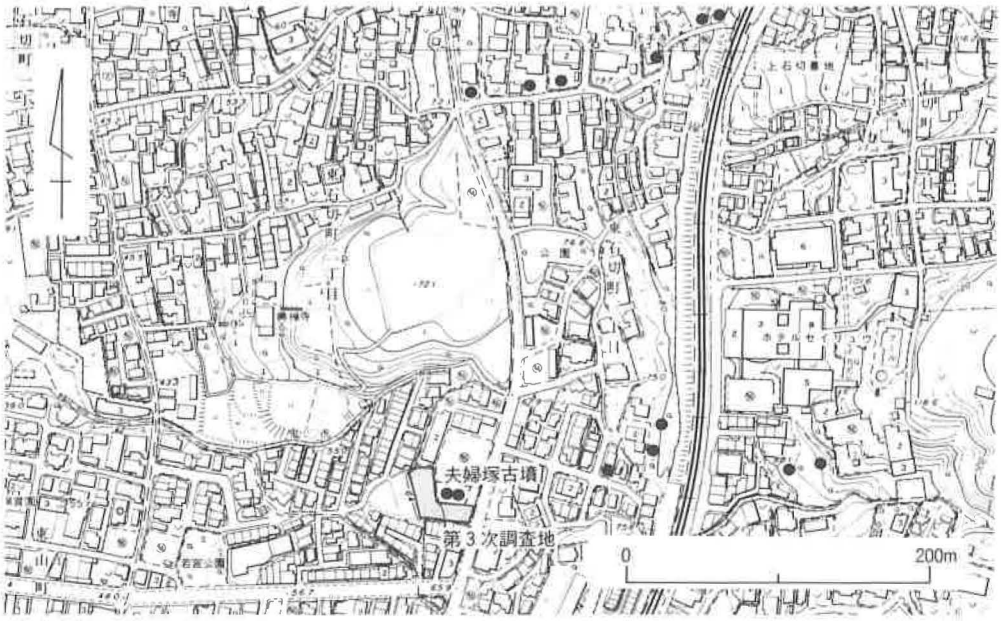
図版１　遺構　１．南壁断面（Ａ地区）　２．池状遺構（Ａ地区）
図版２　遺構　１．池状遺構内集石検出状況（Ａ地区）　２．池状遺構内集石検出状況（Ａ地区）
図版３　遺構　１．遺物出土状況（Ａ地区）　２．溝１（Ａ地区）
図版４　遺構　１．落ち込み１（Ａ地区）　２．落ち込み１内遺物出土状況（Ａ地区）
図版５　遺構　１．南壁断面（Ｂ地区）　２．遺構全景（Ｂ地区）
図版６　遺構　１．溝２・落ち込み２・ピット群（Ｂ地区）　２．ピット群（Ｂ地区）
図版７　遺構　１．土坑３（Ｂ地区）　２．土坑２（Ｂ地区）
図版８　遺物　須恵器
図版９　遺物　須恵器
図版10　遺物　須恵器
図版11　遺物　須恵器
図版12　遺物　須恵器
図版13　遺物　須恵器・土師器・瓦器・装飾壺部品・耳環
図版14　遺物　１．須恵器　２．須恵器
図版15　遺物　１．須恵器　２．瓦器
図版16　遺物　１．瓦器・土師器　２．瓦器
図版17　遺物　１．土師器・輸入磁器・陶磁器　２．陶磁器
図版18　遺物　１．瓦器　２．瓦器・陶磁器
図版19　遺物　１．瓦器・須恵器　２．金属製品
図版20　遺物　１．埴輪　２．埴輪

Ⅰ．調査に至る経過

神並古墳群遺跡は同古墳群内で古墳以外の遺構が確認されたことによって周知された遺跡である。古墳群の範囲が遺跡に相当する。第１次調査は昭和57年に国庫補助事業として東大阪市教育委員会文化財課によって実施された。調査地は東大阪市東石切町３丁目３－16番地に所在する千手寺境内である。本堂の老朽化に伴って現存する本堂の跡地に再建されることになり、工事に先だって調査がおこなわれた。本調査では現存する本堂の前身にあたる江戸時代初期の基壇が検出された。また、室町時代の瓦や土器、鉄釘、銭貨なども出土している。明確な遺構は出土していないが、出土した瓦より本堂の初源は室町時代中期と考えられている。(1)

第２次調査地は東石切町２丁目1104番地にあたる。本調査地は双円墳と考えられている夫婦塚古墳も含まれている。昭和63年に共同住宅建設工事が当敷地内で計画された。株式会社富士住建と東大阪市教育委員会が協議した結果、夫婦塚古墳は保存されることになった。また、古墳の墳丘規模、周濠の有無、関連遺構の確認が必要との見解が出され、財団法人東大阪市文化財協会に委託され調査が実施された。(2) 工事予定地は４段になっている敷地であり、各段に合計６ヶ所の試掘トレンチを設定し実施された。試掘の結果、東側２段で中世の遺構及び遺物、古墳時代の須恵器、土師器が検出された。西側２段では遺構、遺物は検出されなかった。

今回、第２次調査の試掘結果を踏まえて株式会社富士住建と東大阪市教育委員会文化財課が協議した結果、東側２段の調査が必要となった。発掘調査は財団法人東大阪市文化財協会に委託された。調査面積は700㎡であり、昭和64年１月６日～平成１年４月17日まで現地調査を実施した。



第１図　調査位置図

II. 位置と環境

神並古墳群遺跡は東大阪市上石切町から東石切町一帯に広がる同古墳群内に包括される遺跡である。生駒山西麓に位置し、標高70～120mを測る。同遺跡では古墳以外に中世～近世の遺構、遺物が検出されている。

同遺跡の周辺部に人々が住み始めるのは旧石器時代からである。旧石器時代の遺跡は古くより知られている草香山、芝坊主山、正興寺山遺跡などがあり、ナイフブレードや有舌尖頭器が発見されている。これらの遺跡より出土した資料はいづれも採集品である。近年、神並、鬼虎川遺跡の調査でも旧石器が出土している。

縄文時代になると東大阪市域では最も古い神並遺跡が出現する[3]。同遺跡は西500mに位置し、早期の遺跡である。多量の押型文土器と共に石器、土偶などが出土している。また、炉跡も検出されている。出土量は少ないが日下[4]、山畑遺跡[5]でも押型文土器は発見されている。前期～中期の土器は出土量は少ないが鬼虎川遺跡より出土しており、同時期の海岸線が確認されている。早期～中期の遺跡数は少ないが、後期～晩期になると遺跡の出現数が増加し、集落の規模も大きくなる。日下、鬼塚、縄手、馬場川遺跡などが代表的な例としてあげられる。日下遺跡では炉跡や環状列墓[6]などが発見されており、縄文時代の墓制を考える上で貴重な資料となっている。また、鬼塚遺跡では洗骨再葬墓が検出され、新知見が得られている。

弥生時代になると遺跡数は急激に増加し、生駒山西麓だけではなく、平野部にも出現する。生駒山西麓の扇状地には中垣内、芝ヶ丘、植附、西ノ辻、鬼塚、縄手、馬場川遺跡などが存在する。扇状地から平野部に移行する所には鬼虎川、北鳥池などが存在する。西ノ辻、鬼塚、鬼虎川、縄手遺跡は前期～中期に大集落を形成していたと考えられ、遺跡の規模も大きい。平野部には大集落を形成していた瓜生堂遺跡や山賀、上小阪、高井田遺跡などが存在する。また、中期～後期には標高60～100mを測る高地にも遺跡が出現し、山畑、岩滝山遺跡などがあげられる。

古墳時代になると前代と同様の位置に集落が形成されているが、新たに古墳の造営が活発におこなわれている。東大阪市域では中期の古墳が最も古く、塚山、大賀世、芝山古墳などがある。後期になると群集墳が形成されるようになり、生駒山西麓の各尾根筋に存在する。夫婦塚古墳[7]を含む神並古墳群もその１つであり、北に辻子谷古墳群、南にみかん山、出雲井、客坊山、山畑、花草山古墳群などが点在する。これらの古墳は10基前後のものから数十基にも及ぶものがある。

奈良時代以降になると寺院、城、集落などの遺跡がある。当遺跡周辺では北西700mに法通寺があり、近年の調査で多量の瓦と共に建物基壇が検出されている[8]。奈良～中世の集落は西に広がっており、神並[9]、西ノ辻[10]、水走遺跡などがある。これらの遺跡からは掘立柱建物、井戸、土坑、溝などの遺構や多量の土器、木製品、金属製品などが出土している。また、中世の墓制を考える上では貴重な木棺墓や土坑墓も検出されている。

1 日下遺跡
2 法通寺跡
3 神並遺跡
4 正興寺山遺跡
5 神並古墳群
6 みかん山古墳群
7 鬼塚遺跡
8 鬼虎川遺跡
9 水走遺跡
10 出雲井古墳群
11 客坊山古墳群
12 山畑古墳群
13 縄手遺跡
14 岩滝山遺跡
東大阪市
東大阪市
0
1 km

第２図　遺跡周辺図

III. 調査の概要

1．調査の方法と地区割

調査地の現状は2段になっているので、東側の上段をA地区、西側の下段をB地区と仮称した。平面及び断面実測図作成にあたっては国土座標に準拠した。調査地は10m区画で基準ラインを設定した。南北方向（X軸）のラインを西よりA～D、東西方向（Y軸）のラインを北より1～5とした。Aラインは－146.780、Dラインは－146.810になる。1ラインは－31.670、5ラインは－31.710になる。遺物はA、B地区の仮称名で取り上げた。

調査は地表より約20㎝は盛土であるので機械掘削した。下層は人力掘削で精査したが、大部分が整地層であった。

2．層位

A地区（第3図）

第1層　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト層。粗砂～小礫を多く、礫を少量含む。

第2層　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト層。粗砂を含む。赤褐色粘土を斑点状に含む。

第3層　オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト層。粗砂～小礫を多く、植物遺体を少量含む。

第4層　オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質粘土層。粗砂～礫を含む。

第5層　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト層。粗砂と植物遺体を含む。

第6層　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト層。小礫を含む。

第7層　オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト層。粗砂を含む。

第8層　黄褐色（2.5Y5/4）シルト層。粗砂～小礫を含む。

第9層　オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト層。粗砂～礫を含む。

第10層　褐色（10YR4/4）シルト層。粗砂～礫を含む。

第11層　黄褐色（10YR4/6）シルト層。細砂～礫を含む。

第12層　黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト層。粗砂～礫を含む。

第13層　黄褐色（10YR4/6）シルト層。細砂～礫を含む。

第14層　黄褐色（10YR5/6）シルト層。粗砂～礫を含む。植物遺体を少量含む。

第15層　黄褐色（10YR5/4）シルト層。粗砂～礫を含む。

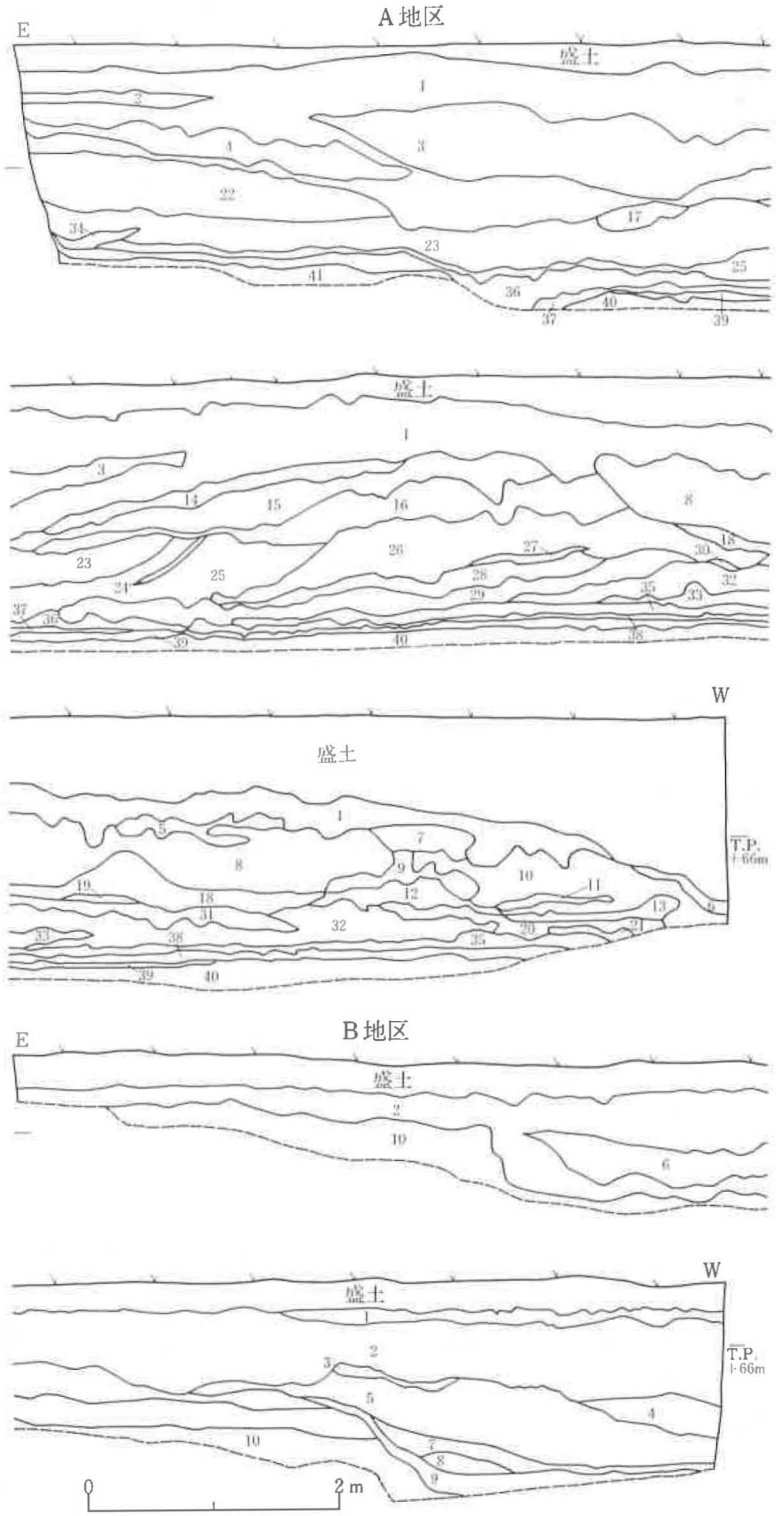
第16層　褐色（10YR4/6）粘土質シルト層。粗砂～礫を含む。

第17層　褐色（10YR4/6）シルト質粘土層。粗砂～礫を含む。赤褐色粘土をブロック状に含む。

第18層　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト層。粗砂～小礫を含む。

第19層　褐色（10YR4/4）粘土質シルト層。粗砂を含む。

第20層　オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト層。粗砂～礫を含む。赤褐色粘土を斑点状に含む。



第3図　A・B地区南壁断面実測図

第21層　黄褐色（10YR5/8）シルト層。粗砂～礫を含む。

第22層　黄褐色（10YR5/6）シルト質粘土層。粗砂～小礫を含む。明褐色粘土と明黄褐色粘土を斑点状、褐色シルトをブロック状に含む。

第23層　オリーブ褐色（2.5Y4/2）シルト層。粗砂～礫を含む。黄褐色粘土をブロック状に含む。

第24層　灰オリーブ色（5Y4/2）シルト層。粗砂を含む。明褐色粘土をブロック状に含む。

第25層　灰オリーブ色（5Y5/3）シルト層。粗砂～礫を含む。

第26層　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト層。粗砂～礫を含む。

第27層　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト層。粗砂～礫を含む。明褐色粘土質シルトをブロック状に含む。

第28層　明褐色（7.5YR5/6）シルト質粘土層。細砂～礫を含む。黄褐色粘土を斑点状に含む。

第29層　暗オリーブ色（5Y4/2）粘土質シルト層。粗砂～礫を含む。赤褐色粘土を斑点状に含む。

第30層　オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト層。粗砂を含む。

第31層　オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト層。粗砂～小礫を含む。黄褐色粘土をブロック状に含む。

第32層　明褐色（7.5YR5/8）シルト質粘土層。細砂～礫を含む。

第33層　黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト層。粗砂～礫を含む。明黄褐色粘土をブロック状に含む。

第34層　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト層。粗砂を含む。

第35層　灰オリーブ色（5Y4/2）シルト層。粗砂～小礫を含む。赤褐色粘土をブロック状に含む。

第36層　灰オリーブ色（5Y4/2）シルト層。粗砂～小礫を含む。

第37層　褐色（7.5YR4/6）粘土質シルト層。粗砂を含む。

第38層　褐色（7.5YR4/6）シルト質粘土層。粗砂を含む。

第39層　褐色（10YR4/6）粘土質シルト層。粗砂～小礫を含む。

第40層　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘土質シルト層。粗砂を含む。黄褐色粘土をブロック状に含む。

第41層　灰オリーブ色（5Y4/2）粘土層。粗砂を含む。黄褐色粘土を斑点状に含む。

今回の調査では南壁断面の実測図を作成した。第1～39層は池状遺構を埋めた際の整地層であり、連続した層序は認められない。大部分の層が大きなブロック状となる。第40・41層は堆積層である。第1～39層と第40・41層より古墳時代の須恵器、土師器、中世～近世の土器が出土した。整地層は近世の時期と考えられる。A地区では北から南に向かって整地層が厚くなる。

B地区（第３図）

第１層　黄褐色（2.5Y5/4）シルト層。粗砂を含む。植物遺体を少量含む。

第２層　黄褐色（2.5Y5/6）シルト層。粗砂～小礫を含む。植物遺体を少量含む。

第３層　黄褐色（2.5Y5/4）シルト層。粗砂を含む。赤褐色粘土質シルトをブロック状に含む。

第４層　褐色（10YR4/6）シルト層。粗砂～小礫を含む。明褐色シルトをブロック状に含む。

第５層　褐色（10YR4/4）シルト層。粗砂～礫を含む。植物遺体を少量含む。

第６層　オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト層。多量の礫を含む。

第７層　暗オリーブ色（５Y4/3）シルト層。粗砂～礫を含む。植物遺体を少量含む。

第８層　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘土質シルト層。明褐色粘土を斑点状に含む。

第９層　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質シルト層。礫を含む。明赤褐色粘土質シルトを斑点状に含む。

第10層　明褐色（10YR5/8）粘土質シルト層。粗砂～礫を含む。黄褐色粘土質シルトを斑点状に含む。

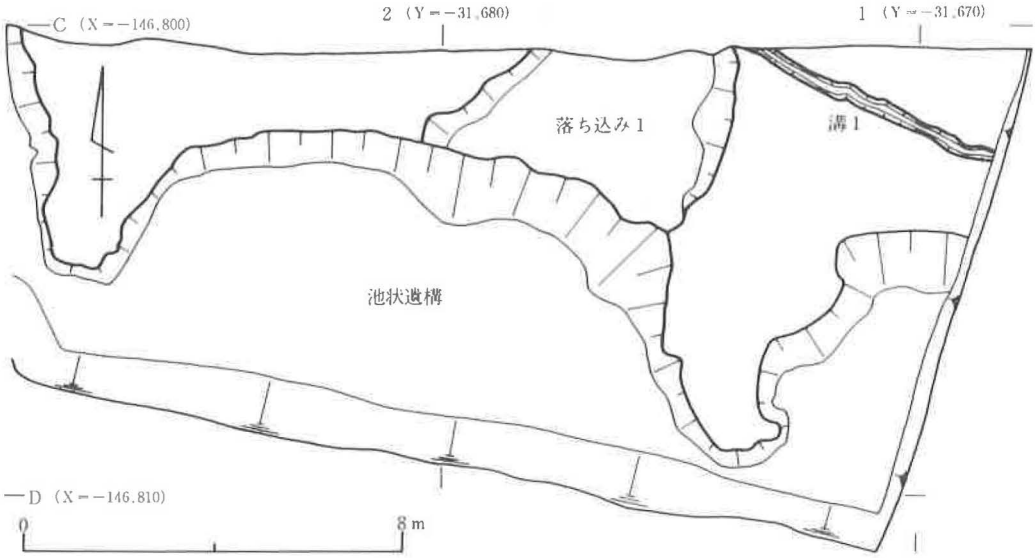
B地区では南壁断面の実測図を作成した。A地区と同様に第１～10層は整地層である。整地層は東から西に向かって厚くなる。近世の時期である。

３．遺構

A地区（第４図）

A地区では溝１、落ち込み１、池状遺構１を検出した。すべて近世の時期である。

溝１　北東部で検出した。南東から北西方向に伸びる溝であり、断面が浅いU字状を呈する。



第４図　A地区遺構実測図

幅0.2～0.3m、深さ0.1mを測る。

落ち込み１　北側で検出した。池状遺構によって南側を切られており、本来は楕円形を呈していたと考えられる。径2.5m、深さ0.5mを測る。遺構内には古墳時代の土器と10～30㎝大の石を多く含む。

池状遺構　調査地の南側半分に広がる遺構である。平面形は連続する弧を描き、南側部は調査地外にある。残存長10.0m、残存幅2.7m、深さ1.2mを測る。肩部付近に集石が認められ、0.5～1.5m大のものと0.2～0.4m大のものがある。0.2～0.4m大の石は多く認められ、３ヶ所に集中していた。

Ｂ地区（第５図）

Ｂ地区では落ち込み１、溝１、土坑３、ピット15を検出した。すべて近世の時期である。

落ち込み２　南側で検出した。西側を溝２によって切られ、南側は調査地外にあるため平面形は不明。南側に向かって傾斜する。残存長4.3m、残存幅2.1m、深さ1.2mを測る。

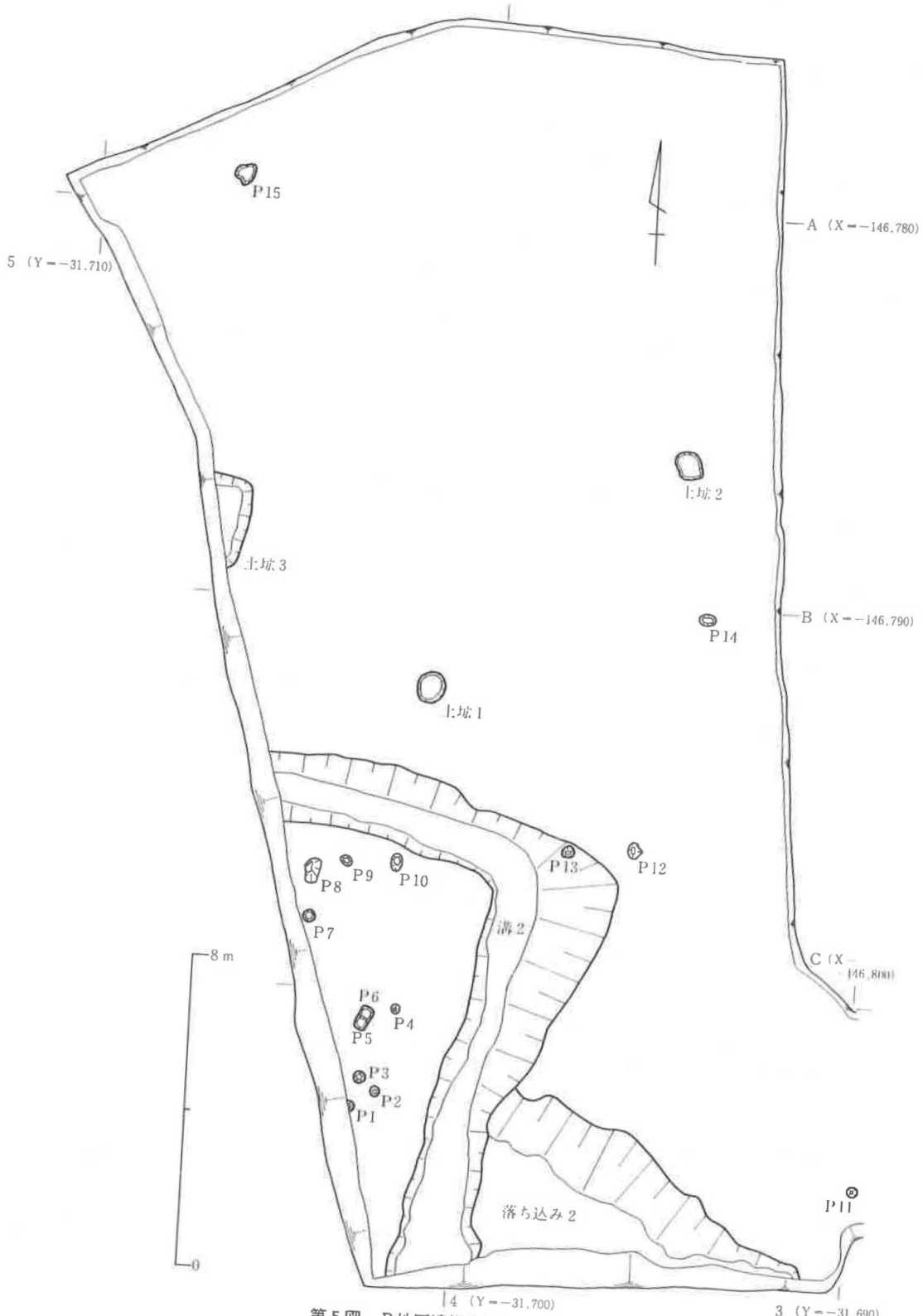
溝２　南西部で検出した。Ｌ字形に曲がる溝であり、西側と南側が調査地外に伸びる。断面形は浅いＵ字形を呈し、底が西側と南側に向かって傾斜する。幅0.9～1.5m、深さ0.2～0.3mを測る。

土坑１　調査地のほぼ中央で検出した。楕円形を呈する土坑であり、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.3mを測る。

土坑２　調査地の東側で検出した。やや不整形の楕円形を呈する土坑であり、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。遺構内の上面で炭と焼土層が認められた。

土坑３　調査地の西側で検出した。西側半分が調査地外にある。隅丸長方形を呈する土坑と考えられ、長辺2.4m、残存短辺1.0m、深さ0.3mを測る。

ピット　15のピットを検出した。円形を呈するものが多いが、楕円形や不整形のものもある。径0.2～0.4m、深さ0.1～0.3mのものが多い。溝２の西側は平坦な面になっており、ピットが集中していた。



第5図　B地区遺構実測図

4．出土遺物

今回の調査では古墳時代～近世に至る遺物が出土した。古墳時代の遺物は須恵器、土師器、埴輪、金属製品がある。中世～近世の遺物は瓦器、土師器、須恵器、輸入磁器、陶磁器がある。これらの遺物は、A、B地区の整地土内より混在した状態で出土した。古墳時代の須恵器、土師器はA地区の落ち込み1と池状遺構に集中していた。しかし、池状遺構の底より近世の陶磁器である染付などが出土していることから、古墳時代の単一時期ではない。また、埴輪はB地区で多く認められた。

遺物の出土状況からA地区の第1～39層とB地区の第1～10層の整地土の分層は難しく、遺物出土層は整地層として一括して扱う。土器の詳細については観察表に記した。

古墳時代の土器（第6～9図）

須恵器と土師器が出土した。

須恵器　杯蓋、壺蓋、杯身、高杯、甕、甕、無頸壺、脚付無頸壺、長頸壺、脚付有蓋壺、脚付子持壺、器台、椀の器種がある。

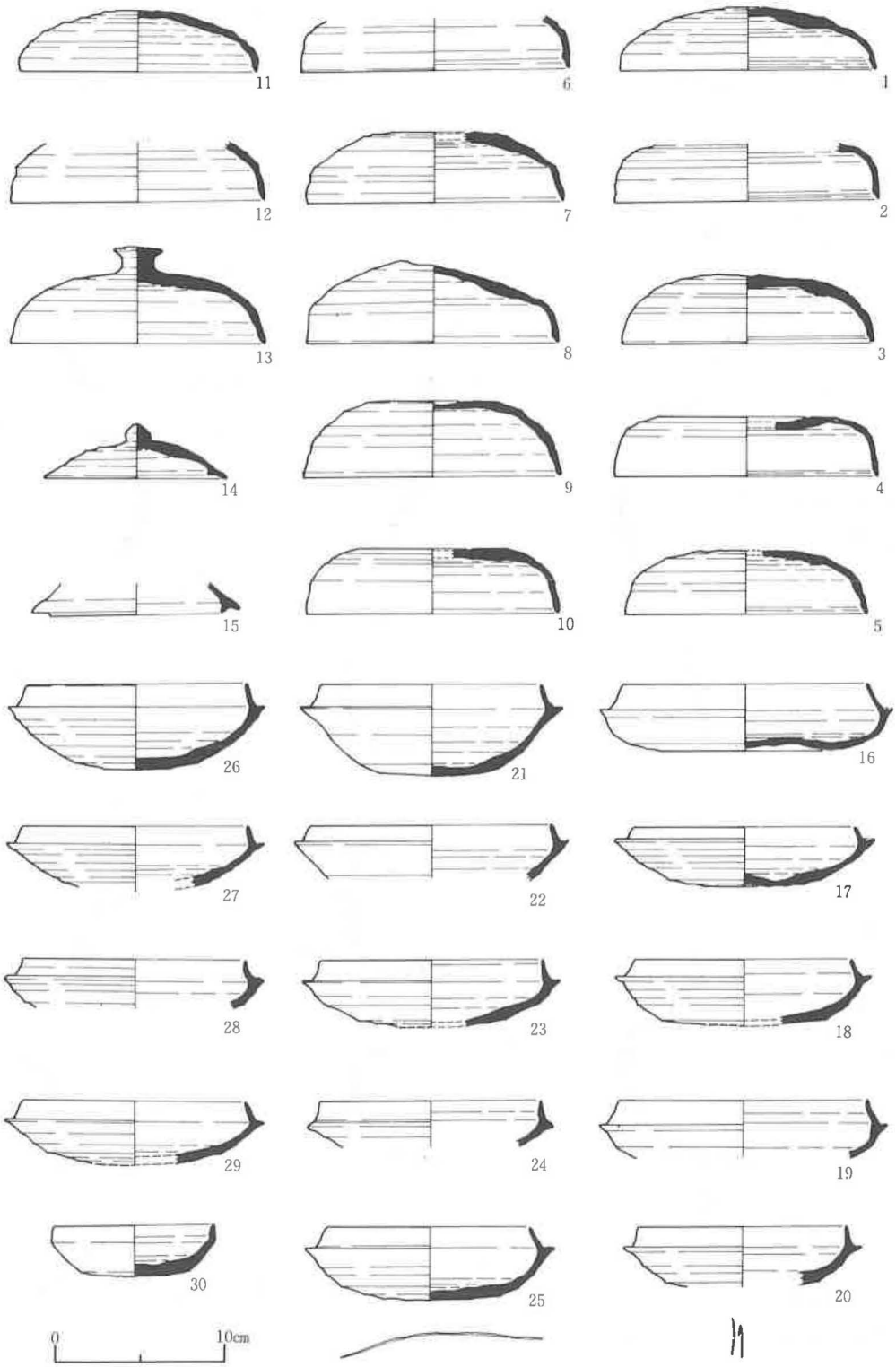
1～12・14・15は杯蓋である。天井部につまみをもたないもの（1～12）と宝珠つまみのつくもの（14・15）がある。1～12は天井部が丸いものが多いが、やや平坦なもの（2・10）や中央で凹むもの（4・9）もある。天井部と体部の境は不明瞭なものが多いが、明瞭な稜がつくもの（2・4）もある。口縁端部は浅い凹線を施すもの（1～6）と丸く終わるものがある。天井部外面は約2/3～4/5を回転ヘラケズリするものが多い。8は天井部内面に当て具痕を残す。

13は有蓋壺とセットになる蓋と考えられる。1～12の杯蓋の中央に円形を呈するつまみをつけたものである。

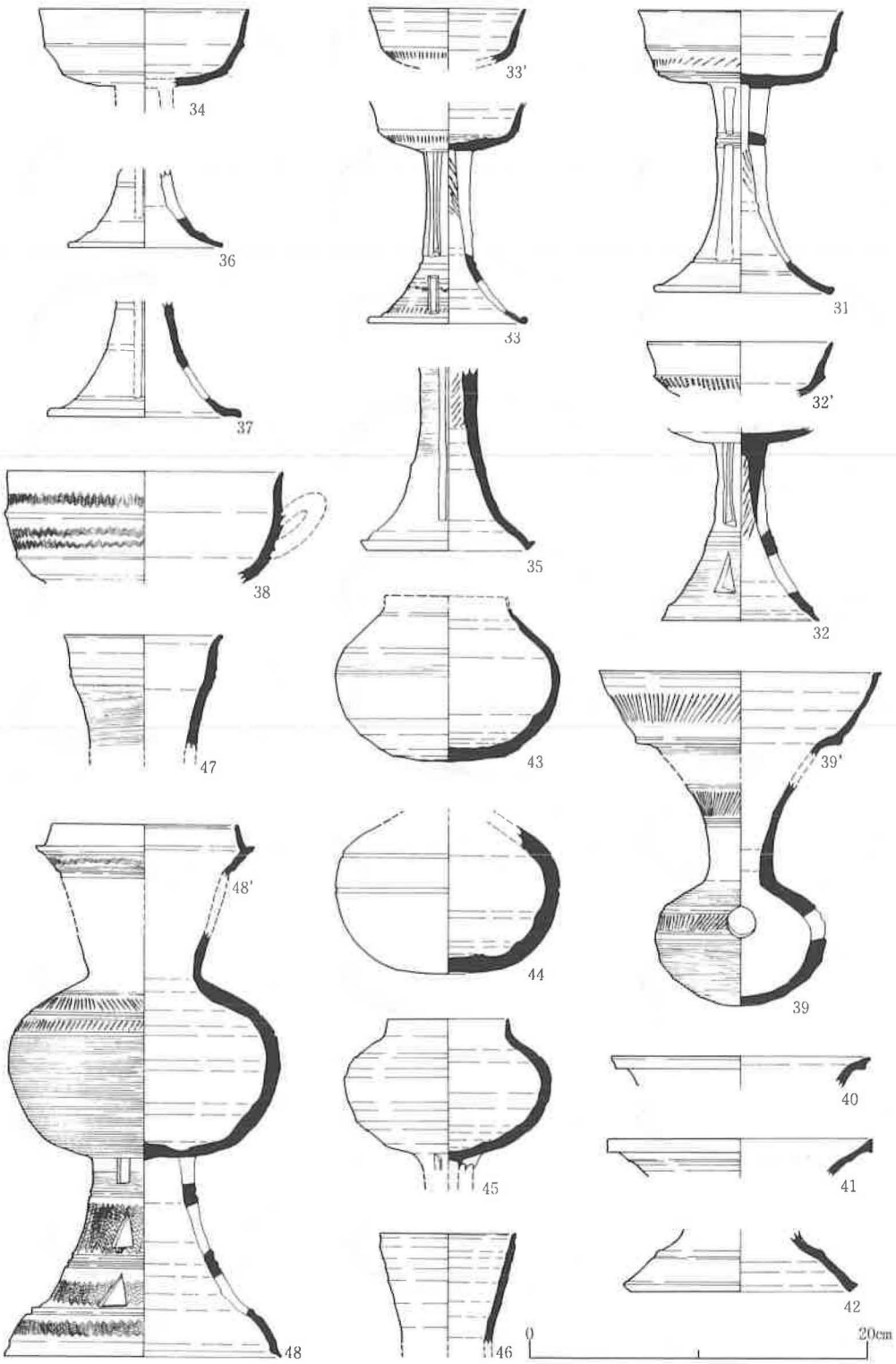
16～30は杯身である。受部がつくもの（16～29）とつかないもの（30）がある。16～29は体部が浅いもの（17）や深いもの（21）などがある。また、たちあがりも長いもの（16）や短いもの（17）があるが、口縁端部は丸く終わる。底部外面は約1/2～4/5を回転ヘラケズリするものが多い。20・25は底部外面にヘラ記号を施す。25は受部と底部外面に重ね焼した際に熔着した土器を打ち欠いた痕跡が残る。30は浅い椀状を呈するものである。

31～38は高杯である。長脚2段透のもの（31～37）と短脚1段透のもの（38）がある。長脚2段透の高杯は杯部に凸帯を施すもの（31・34）と稜がつくもの（32・33）がある。杯部と脚部にはヘラ描き文様（31）、櫛描き文様（32・33）、無文のもの（34）がある。脚部は凹線を施すものが多いが、施さないもの（35）もある。透は長方形、台形、三角形などがあり、3方向に施す。32、35は脚部外面にカキメを施す。38は深い椀状を呈する高杯である。杯部外面は2条の凸帯で区画し、櫛描き波状文を2帯施す。外面には把手の剝離した痕跡が顕著に残る。

31と31'は同一個体と考えられる甕である。体部は扁球形を呈し頸部が長く逆八字形に伸び、口縁部が上方へ開く。体部に円孔を1孔穿つ。口縁部、頸部、体部の3ヶ所にヘラ描き列点文を施す。体部外面はカキメを施す。


11
6
1
12
7
2
13
8
3
14
9
4
15
10
5
26
21
16
27
22
17
28
23
18
29
24
19
30
25
20
0
10cm

第６図　土器実測図



第７図　土器実測図

40・41・56・57は甕である。40・41は小形のものであり、口縁部を上方へ拡張するもの（40）と面をもつもの（41）がある。56・57は大形のものであり、最大径が底部より約3/5の位置にあり、球形に近いもの（56）と底部より約2/3の位置にあり、長胴のもの（57）がある。56は口縁部が大きく外上方へ伸びる。体部外面は擬格子のタタキの後、部分的なカキメ、内面に当て具痕を残す。56は底部と体部に焼成時に熔着した土器片が残る。

43・44は無頸壺である。丸底の底部より体部が扁球形を呈するものである。体部外面には凹線を施す。

45は脚付無頸壺である。扁球形の体部より、口縁部がゆるく外反する。脚部は大部分を欠損するが、3方向に透を施す。

46・47は長頸壺である。頸部が細い筒状を呈し、口縁部がゆるく外反する。47は頸部外面にカキメを施す。

48と48'は同一個体と考えられる脚付有蓋壺である。頸部を欠損する。頸部が外上方へ開き、水平方向に伸びる受部がつく。口縁部は内傾し、口縁端部に浅い凹線を施す。体部は扁球形を呈する。脚部は八字形に開き、裾部で内弯する。脚部には3方向に3段の透を施し、上段が長方形、中下段が三角形を呈する。頸部と脚部外面は櫛描き波状文、体部外面は櫛描き列点文を施す。口頸部の上位と体部、脚部上位はカキメを施す。

49と49'は同一個体と考えられる脚付子持壺である。体部は球形を呈し、頸部が大きく逆八字形に開き、口縁部が外反する。脚部は内弯気味に立ち上がる。脚部と体部の境の外面には凸帯がつく。肩部には小形の壺1が残存する。肩部には他に大形の剝離痕2と小形の剝離痕2が残存しており、復原すると大形の剝離痕（壺）4と小形の剝離痕4が交互に配置されていたと考えられる。脚部には4方向に3段の透を施す。体部下半と脚部位の外面はカキメを施す。

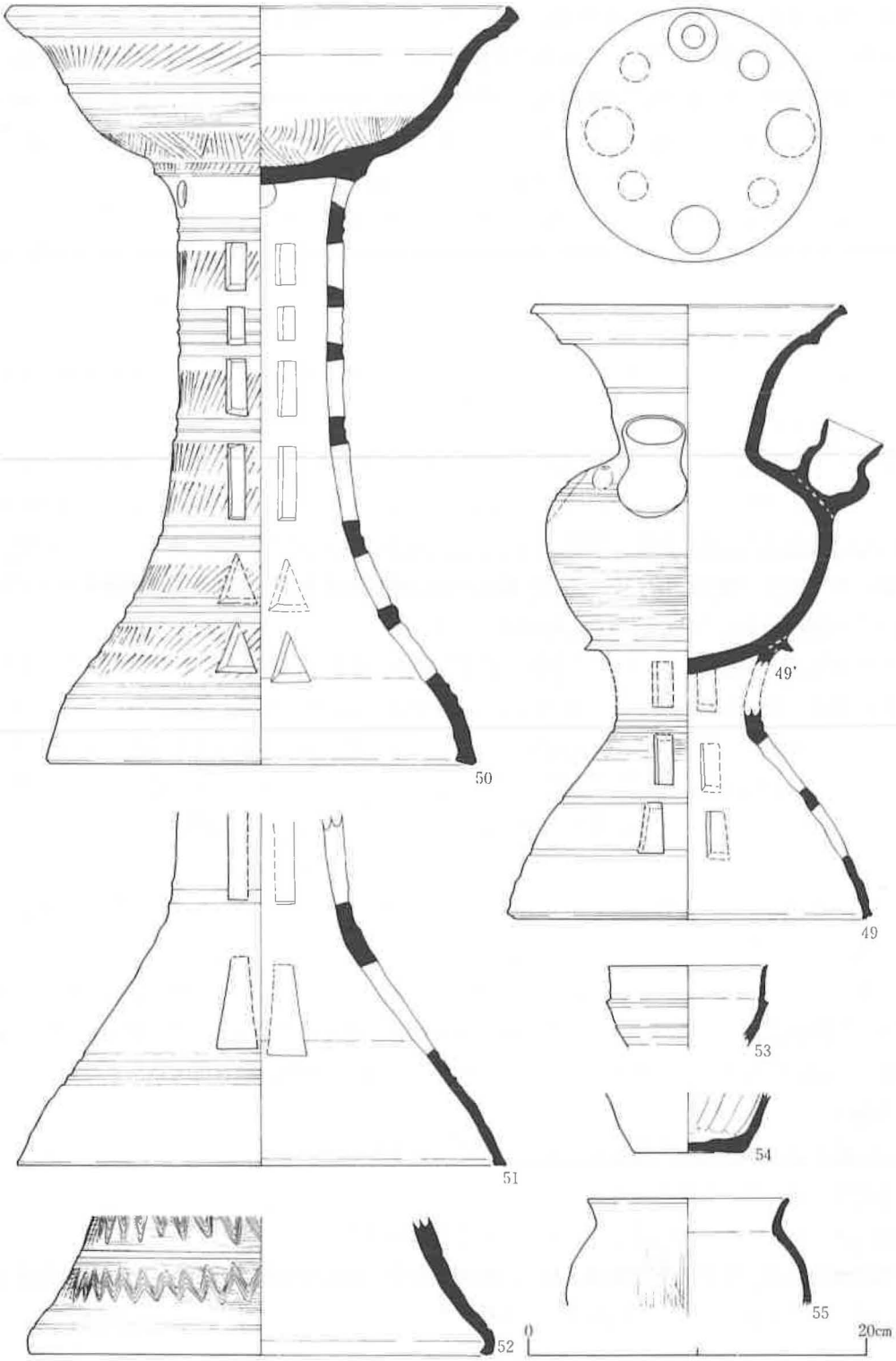
50～52は器台である。50は全形を知り得るものであり、杯底部がゆるく弯曲し、口縁部が外反する。脚部は上半が柱状を呈し、下半が裾広がりになった後、やや内弯する。杯部と脚部の境の外面には凸帯を施し、キザミ目を入れる。脚部には上より円形（1段）、長方形（4段）、三角形（2段）の透を入れる。円形と長方形・三角形が交互になるように配置する。杯部と脚部外面は凹線によって区画し、ヘラ描き列点文を施す。杯底部外面はタタキ、内面に当て具痕が残る。51は長方形と台形の透が残る。52は凹線で区画し、櫛描き波状文を施す。外面はカキメを施す。

53は椀である。体部が内弯気味に伸び、外面に2条の凸帯がつく。

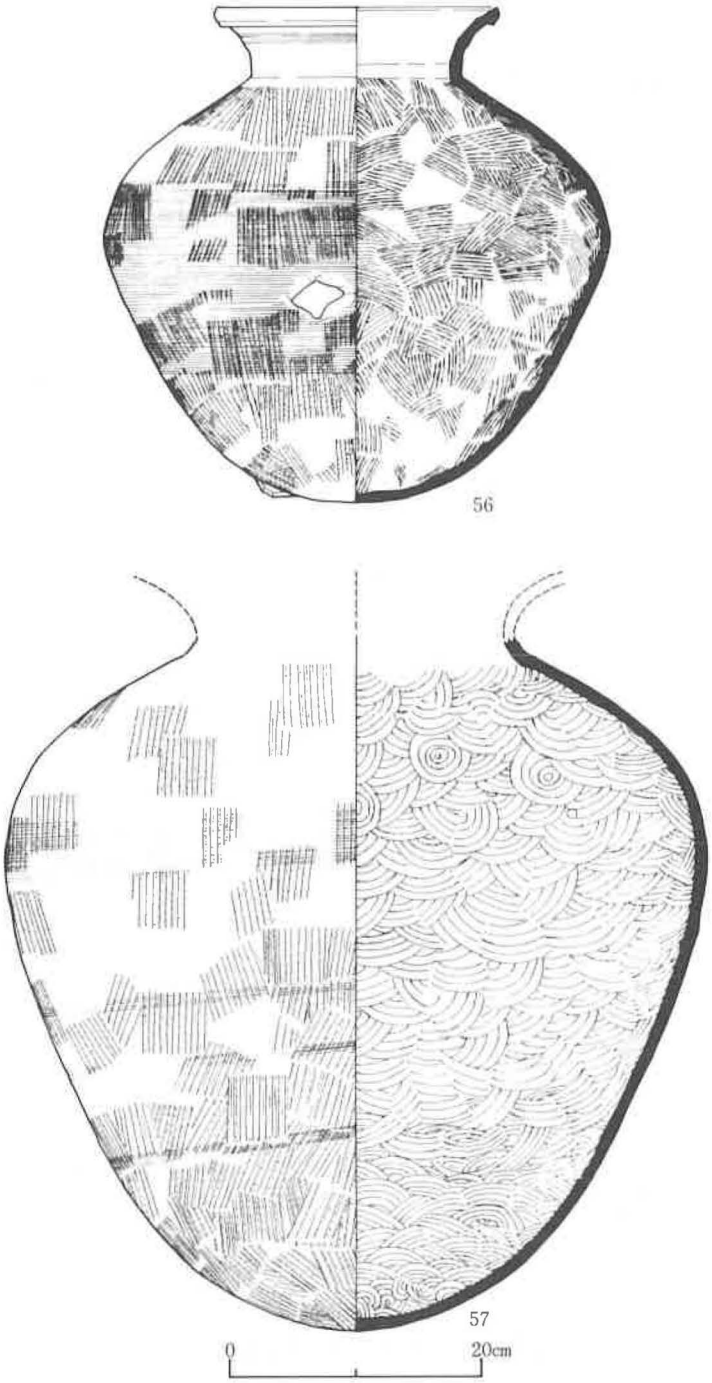
土師器　鉢と甕の器種がある。

54は鉢である。平底の底部より、体部が外上方へ伸びるものである。

55は甕である。張りのある体部より、口縁部がゆるく外反するものである。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ、内面はナデ調整する。



第8図　土器実測図



第９図　土器実測図

中世～近世の土器（第10～13図）

瓦器、土師器、須恵器、輸入磁器、陶磁器が出土した。

瓦器　椀、羽釜、火消壺、火舎、摺鉢の器種がある。

58～63は椀である。口縁端部に沈線を施すもの（58～62）と口縁端部が丸く終わるものがある。体部は浅く、高台は低い。66～79は羽釜である。口縁部が上方かやや内弯気味に伸び、口縁部外面に凹線を施すもの（66～68・70・74）、口縁部が短く内傾し、口縁部直下に鍔がつくもの（71）、口縁部が上方かやや内弯気味に伸び、口縁部外面に段を施すもの（68・75・79）がある。72・73は羽釜の脚部である。88～91は火消壺である。平底の底部より、体部が外上方へ伸び、口縁部に至るものである。93は火舎である。平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。底部には脚がつく。95～103は摺鉢である。平底の底部より、体部が大きく逆八字形に伸びるものである。口縁端部が内傾して面をもつ。体部内面にはおろし目を施しており、７～９条のものが多い。

土師器　羽釜、皿、香炉、火舎の器種がある。

64・65は羽釜である。64は張りの少ない体部より、口縁部が強く外折するものである。口縁端部は内側へ巻き込む。65は口縁部が内傾するものであり、口縁部に小円孔を穿っている。80・81は褐色系の皿であり、口縁部が外反するもの（80）と外上方へ伸びるもの（81）がある。82は香炉であり、平底の底部より体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反するものである。底部には脚がつく。92は火舎であり、平底の底部より体部が深い筒状を呈する。口縁部外面には２条、底部上位には１条の凸帯を施す。口縁部直下の凸帯間にはスタンプ文様を施しているが、風化が著しく詳細は不明である。

須恵器　捏鉢がある。94は捏鉢であり、口縁部が逆八字形に伸びる。口縁端部は内側へ肥厚する。東播系のものである。

輸入磁器　青磁の椀がある。83は椀の底部である。高台は高く、八字形に開く。体部外面には蓮弁文を施す。

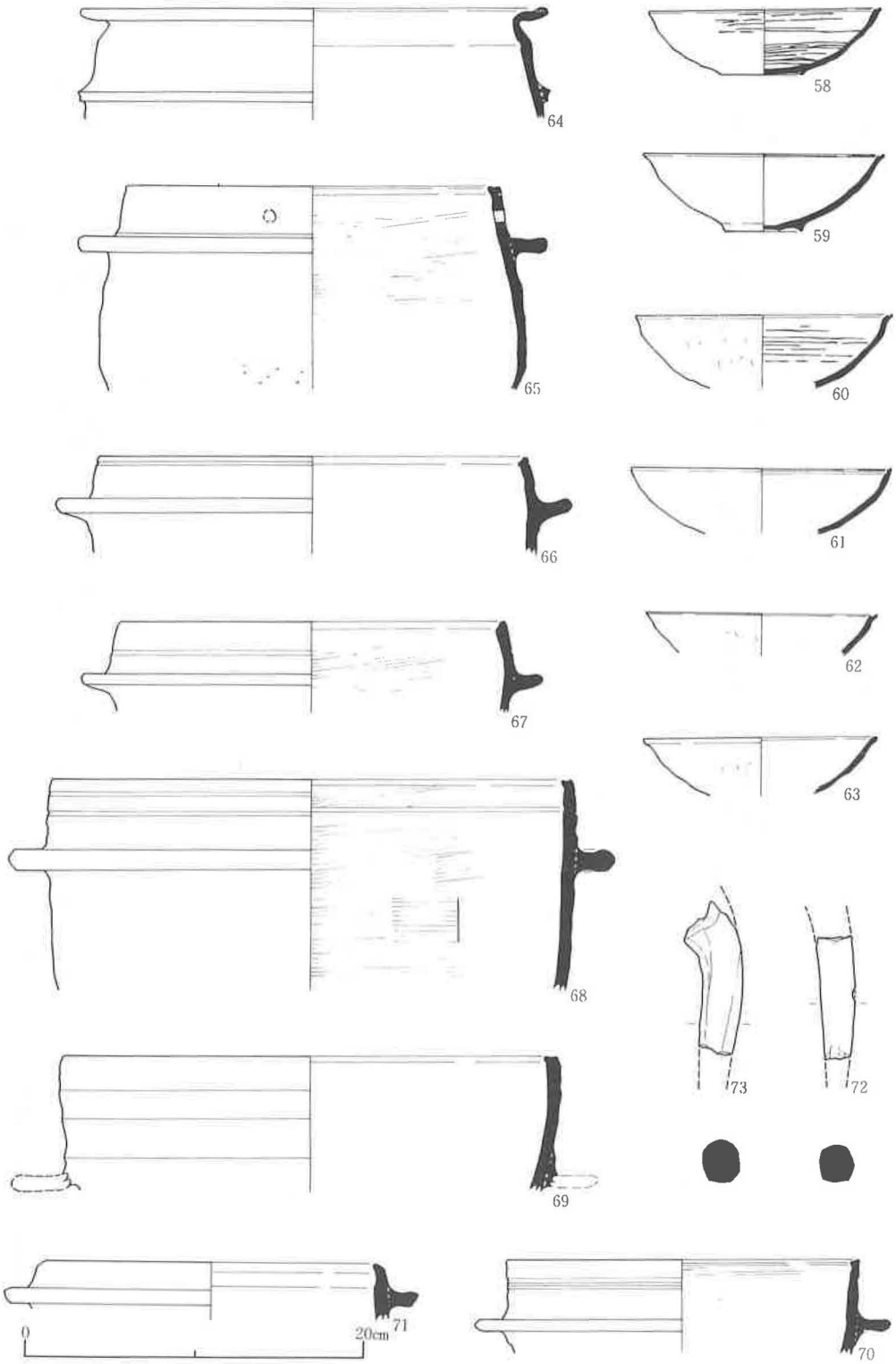
陶磁器　椀、皿、甕の器種がある。

84～87は伊万里焼の椀であり、体部外面に絵柄を描く。108・109・111・112は唐津焼の椀、110は美濃・瀬戸焼の鉄釉椀、106・107は窯不明の椀である。105は皿、113は甕であり、窯は不明である。

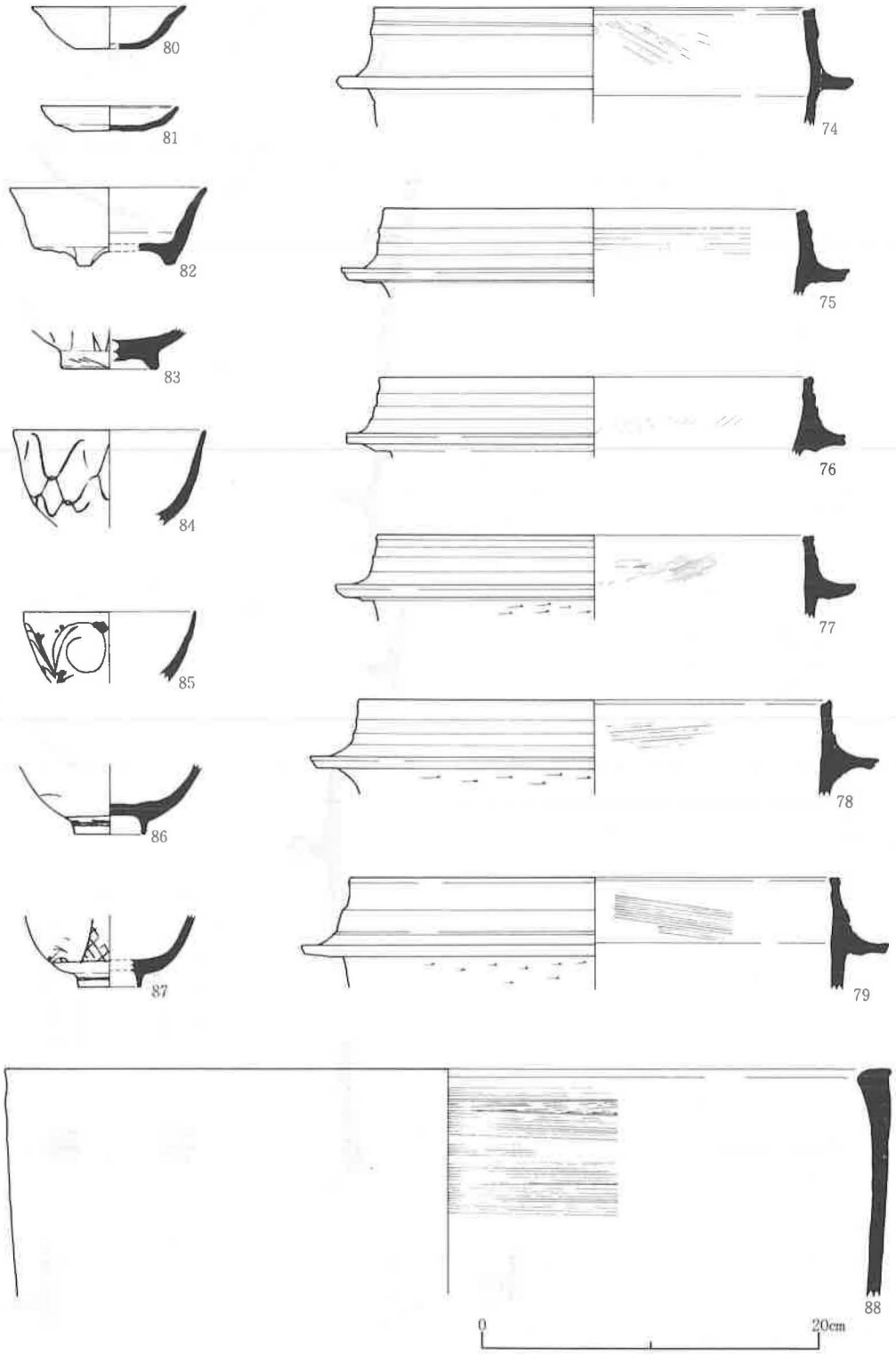
埴輪（第14図）

今回の調査では円筒埴輪が出土した。１～24は円筒埴輪であるが、胎土、色調、調整法などから６個体があると考えられる。１～４、５・６、７～13、14～19、20、21～24のグループに分けられる。13はＡ地区出土。他はＢ地区出土。

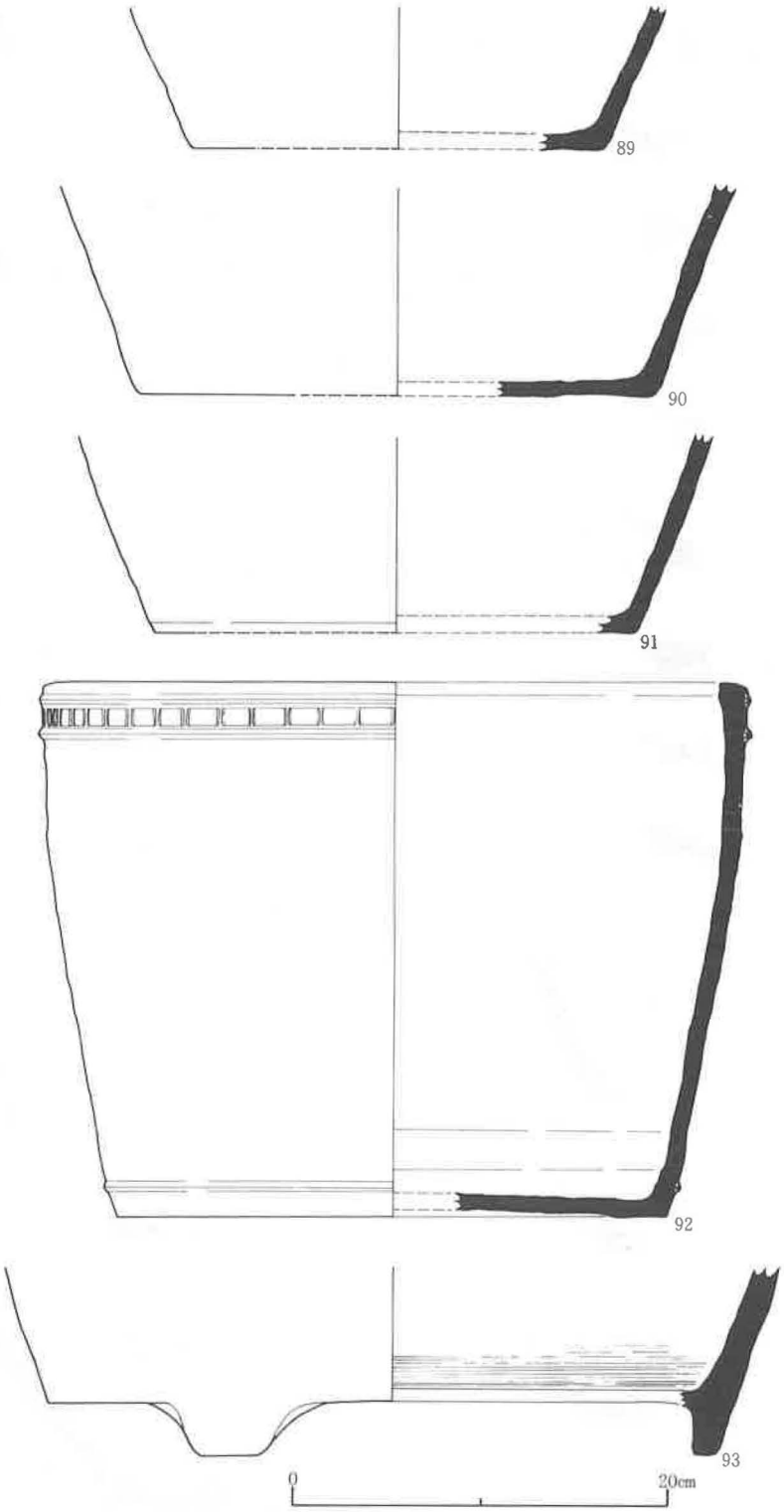
１～４はタガは高く、台形を呈する。外面は縦方向の粗いハケメの後、部分的に横方向のハケメ調整する。内面は縦方向の粗いハケメの後、ナデ調整する。内面には接合痕が顕著に残る。１には円孔が認められる。胎土中には１～３㎜の石英、長石を含み、色調が赤褐色を呈する。



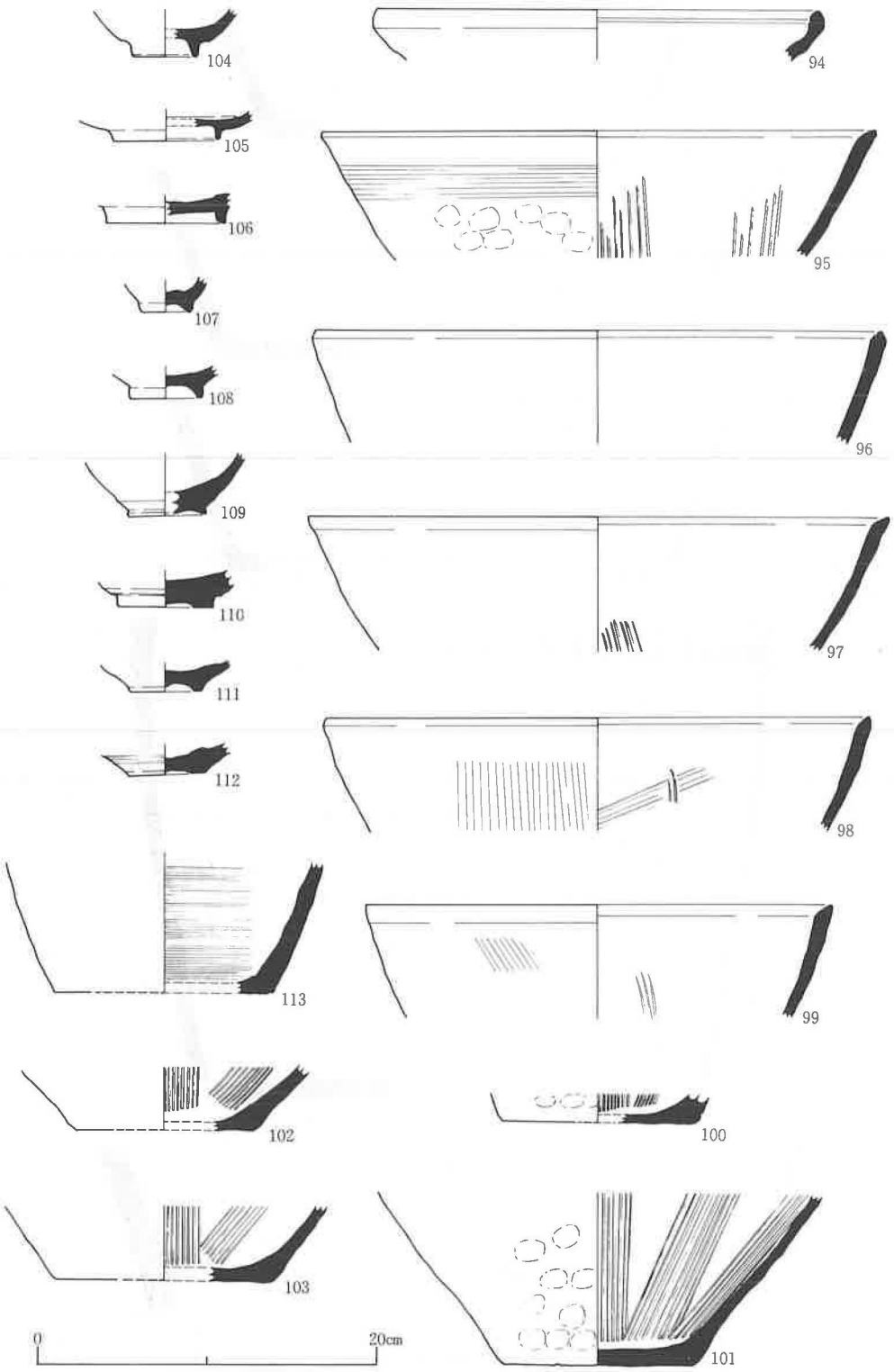
第10図　土器実測図



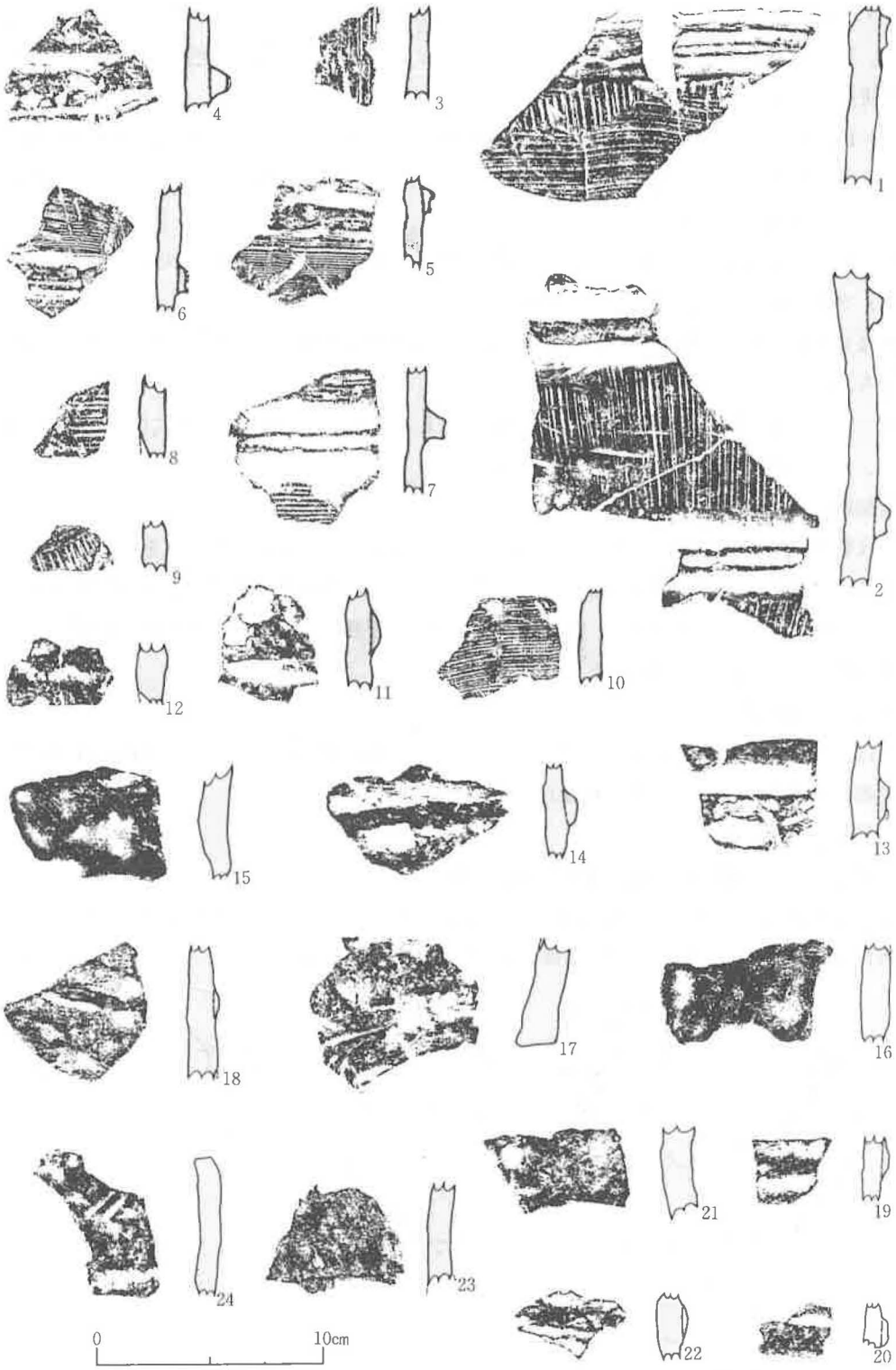
第11図　土器実測図



第12図　土器実測図


104
94
105
95
106
107
96
108
109
97
110
111
98
112
113
99
102
100
103
101
0
20cm

第13図　土器実測図



第14図　埴輪拓影

5・6はタガは低く、台形を呈する。外面は横方向の密なハケメ調整する。内面はナデ調整する。6には円孔が認められる。胎土中には1～2㎜の石英、長石、黒色砂粒を含み、色調が淡紫灰色を呈する。

7～13はタガが高く、台形を呈する。外面は横方向の密なハケメ調整する。内面は横方向のハケメが残るものとナデ調整するものがある。胎土中には1㎜大の石英、長石、クサリ礫を含み、色調が橙褐色を呈する。

14～19はタガは低く、台形を呈する。風化が著しく調整法は不明。胎土中には1㎜大の石英、長石、クサリ礫を含み、色調が淡橙褐色を呈する。

20はタガは低く、台形を呈する。風化が著しく調整法は不明。胎土中には微粒の石英、長石を含み、色調が淡褐色を呈する。

21～24はタガは低く、台形を呈する。風化が著しく調整法は不明。胎土中には1㎜大の石英、長石、クサリ礫を含み、色調が茶褐色を呈する。

装飾壺部品（第15図）

1は装飾壺の部品であり、犬と考えられる。足は消略しており、上部のみを表現する。尾は上方へ折り曲げており、頸を左に向けている。顔は上方へ耳が2本伸びるが片方を欠損する。目と口は刺突によって表現する。胴部裏面には剝離痕が残る。坐っている状態を表現したものと思われる。須恵器。A地区出土。

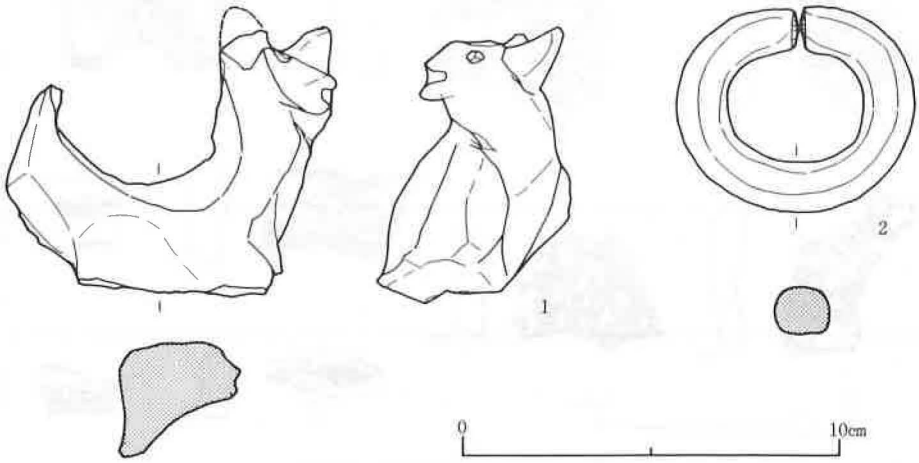
装身具（第15図）

2は耳環である。銅に金箔を被せたものであり、保存状態が良好である。金箔は耳環が切れた位置で折り曲げている。A地区出土。

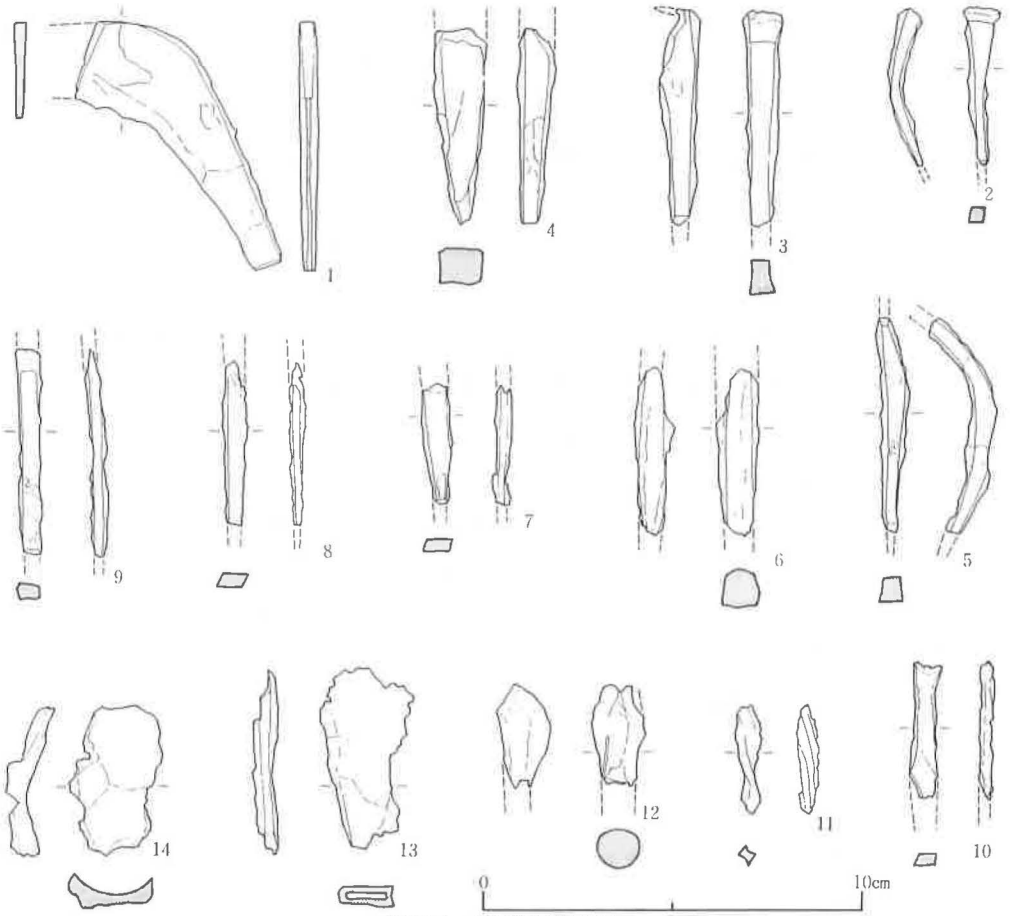
金属製品（第16図）

鉄製品があり、鎌、釘、鏃、用途不明品がある。

1は鎌である。基部がJ字形に曲がる。刃部の約1/2を欠損する。基部より刃部に向かって幅広になる。2～6は釘であり、頭部はL字形に曲がる。先端部に向かって細くなる。断面形



第15図　装飾壺部品・装身具実測図



第16図　金属製品実測図

が方形か長方形を呈する。7～10は長頸鏃の茎と考えられる。断面形が長方形を呈する。11～14は用途不明品であるが、11・12は棒状を呈する。13は断面形が袋状を呈する。14は断面形がU字状を呈する。2・5・6・11はB地区出土。他はA地区出土。

Ⅳ．まとめ

今回の発掘調査で得られた知見を列記し、まとめとしたい。

1．A、B地区で落ち込み、土坑、溝、池状遺構、ピットを検出した。池状遺構や溝2が整地土で埋められており、底より陶磁器の染付などが出土したことから遺構の時期は近世と考えられる。

2．今回の調査地は夫婦塚古墳の南と西に隣接しており、同古墳と関連を考える必要がある。夫婦塚古墳の調査では東側石室の敷石が玄室の一部と羨道にかけて抜き取られていた[11]。今回、A地区の池状遺構で検出した3ヶ所の集石は東側石室より排除されたものと考えられる。排除されたのは近世である。

3．近世の整地によって削平を受けているので夫婦塚古墳の墓前祭祀の有無は不明であるが、

完形に近い大形の甕2を検出したので、墓前祭祀があった可能性が高い。

4．今回、出土した須恵器はＴＫ208型式、ＴＫ10型式、ＴＫ43～ＴＫ209型式のものがある。ＴＫ10型式（６世紀中葉）とＴＫ43～ＴＫ209型式（６世紀後半～末）のものは、夫婦塚古墳の副葬品と同一時期である。ＴＫ10型式のものが東側石室のものとＴＫ43～ＴＫ209型式のものが西側石室と対応する。両石室内より敷石と同様に取り出されたものと考えられる。ＴＫ208型式（５世紀後半）の高杯（38)、椀（53）は夫婦塚古墳の築造より古くなることから、周辺に同時期の集落があったと考えられる。

5．土器接合作業の段階で夫婦塚古墳石室内より出土した土器と接合した結果、高杯（33)、脚付有蓋壺（48)、脚付子持壺（49)、器台（50・51）が今回の調査で出土したものと接合できた。これらはいづれも東側石室より出土したものである。このことから大部分の須恵器は夫婦塚古墳の副葬品であったと考えられる。

6．Ｂ地区を中心にして円筒埴輪が出土した。埴輪の時期は６世紀中葉のものであり、夫婦塚古墳の築造と同一時期である。夫婦塚古墳より流出したものと考えられる。

注

(1) 水野正好　「千手寺発掘調査報告」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要24』　東大阪市教育委員会　1983年

(2) 下村晴文　「夫婦塚古墳範囲確認調査」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.４、№.１　財団法人東大阪市文化財協会　1988年

(3) 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会「神並遺跡Ⅱ」　1987年

(4) 吉村博恵　「日下遺跡出土の押型文土器」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.１、№.４　財団法人東大阪市文化財協会　1986年

(5) 才原金弘　「山畑遺跡採集の遺物」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.３、№.４　財団法人東大阪市文化財協会　1988年

(6) 東大阪市教育委員会　「日下遺跡発掘調査報告」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要24』　1983年
東大阪市教育委員会　「日下遺跡発掘調査概要」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要26』　1985年
東大阪市教育委員会　「日下遺跡第13次発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要27』　1986年

(7) 東大阪市教育委員会　「夫婦塚古墳調査」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要30』　1989年

(8) 財団法人東大阪市文化財協会　「法通寺」　1985年

(9) 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会　「神並遺跡Ⅰ」　1986年
東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会　「神並遺跡Ⅲ」　1988年

(10) 大阪府教育委員会　「神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ」　1987年
東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会　「西ノ辻・鬼虎川遺跡」　1988年

(11) 注(7)と同じ

観　察　表

凡　例

器種	器形	番号	法　量（cm）	備　考
須恵器	壺	○ ↓ 土器番号	○口14.2⟶口径 ○高 5.2⟶器高 ○底 5.6⟶底径 （復）⟶復元値 （残）⟶残存値 （平）⟶平均値 （推）⟶推定値	○精緻、黒色砂粒⟶胎土 ○青灰色⟶色調 ○A地区出土⟶出土地区 ○煤が付着⟶その他
		（挿図・図版番号は共通の番号）		

器種	器形	番号	法　量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備　考
須恵器	杯蓋	1	○口 15.0（復） ○高 3.7	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部が丸い。 ○口縁端部に幅広の凹線を施す。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約2/3 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○天井部内面は回転ナデ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石を含む。 ○青灰色。 ○A地区出土。
		2	○口 15.5（復） ○高 3.3（残）	○天井部と体部の境は明瞭であり、鈍い稜がつく。天井部はやや平坦である。 ○口縁端部に浅い凹線を施す。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は回転ヘラケズリ。ロクロの回転方向は不明。 ○天井部内面は回転ナデ。	○精緻。1㎜大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○A地区出土。
		3	○口 14.6 ○高 4.0	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部が丸い。 ○口縁端部に浅い凹線を施す。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約3/4 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○天井部内面は仕あげナデ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○紫灰色。 ○A地区出土。 ○重ね焼きした際に熔着した痕跡が外面に残る。

器種	器形	番号	法 量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備　考
須恵器	杯蓋	4	○口 15.3 ○高 3.5	○天井部と体部の境は明瞭であり、稜がつく。天井部は中央で凹む。 ○口縁端部に浅い凹線を施す。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約3/4 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は左まわり。 ○天井部内面は回転ナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。 ○Ａ地区出土。
		5	○口 14.1（復） ○高 3.7（残）	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部がやや丸い。 ○口縁端部に浅い凹線を施す。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約3/4 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は左まわり。 ○天井部内面は回転ナデ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗紫灰色。 ○Ａ地区出土。
		6	○口 15.1（復） ○高 3.1（残）	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部の形態は不明。 ○口縁端部に浅い凹線を施す。	○口縁部内外面は回転ナデ。	○精緻。1～4㎜の石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○Ａ地区出土。
		7	○口 14.9（復） ○高 4.1（残）	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部が丸い。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約3/4 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○天井部内面は仕あげナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗青灰色。 ○Ａ地区出土。
		8	○口 14.1 ○高 4.6	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部が丸い。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約4/5 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○天井部内面は仕あげナデするが、同心円の当て具痕が残る。	○精緻。1～5㎜大の石英、長石、桃色の砂粒を含む。1.5㎝大の礫を1点含む。 ○淡青灰色。 ○Ａ地区出土。
		9	○口 15.0（復） ○高 4.5	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部がやや凹む。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約2/3 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○天井部内面は仕あげナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○Ａ地区出土。

器種	器形	番号	法量（㎝）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯蓋	10	○口 14.2（復） ○高 3.9	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部がやや平坦である。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約3/4 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は左まわり。 ○天井部内面は仕あげナデ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。 ○A地区出土。
		11	○口 13.8（復） ○高 3.6	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部が丸い。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約4/5 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○天井部内面は仕あげナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○紫灰色。 ○A地区出土。
		12	○口 14.8（復） ○高 3.5（残）	○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部の形態は不明。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面は回転ナデ。	○精緻。1㎜大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○A地区出土。 ○天井部外面にヘラ記号。1本の直線。
	壺蓋	13	○口 14.9（復） ○高 5.7（残）	○天井部外面の中央に円形を呈するつまみがつく。 ○天井部と体部の境は不明瞭であり、天井部が丸い。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約4/5 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○天井部内面は仕あげナデ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石を含む。 ○暗青灰色。 ○A地区出土。
	杯蓋	14	○口 10.8 ○高 3.2	○天井部外面の中央に宝珠つまみがつく。 ○天井部は低く、丸い。 ○口縁部内面に短いかえりがつく。	○口縁部内外面は回転ナデ。 ○天井部外面は約2/3を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は左まわり。 ○天井部内面は回転ナデ。	○やや粗。微粒の石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○A地区出土。
		15	○口 10.1（復） ○高 1.8（残）	○形態は14と同様。	○調整は14と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○A地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯身	16	○口 14.3（復） ○高 4.0	○たちあがりは長い。内傾した後、ゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○体部は浅く、中央で凹む。 ○受部はやや外上方へ伸び端部が尖り気味に終わる。受部とたちあがり部の境は凹む。	○たちあがり部内外面は回転ナデ。 ○底部外面は約2/3 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○底部内面は仕あげナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○青灰色。 ○A地区出土。
		17	○口 13.0（復） ○高 3.5	○たちあがりは短く内傾する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○体部は浅い。 ○受部は外上方へ伸び、端部が丸く終わる。受部とたちあがり部の境は凹む。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面は約3/5 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は左まわり。 ○底部内面は回転ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。 ○A地区出土。
		18	○口 12.6（復） ○高 3.8（残）	○たちあがりは短い。内傾した後、外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○体部はやや深い。 ○受部は水平方向に伸び、端部が尖り気味に終わる。受部とたちあがり部の境はわずかに凹む。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面の約2/5 は回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○底部内面は仕あげナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡茶灰色。 ○A地区出土。
		19	○口 14.5（復） ○高 3.3（残）	○たちあがりは長く内傾する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○受部は水平方向に伸び、端部が丸く終わる。受部とたちあがり部の境がわずかに凹む。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面の回転ヘラケズリは不明。 ○底部内面の仕あげナデは不明。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。 ○A地区出土。
		20	○口 12.5（復） ○高 3.4（残）	○たちあがりは短い。内傾した後、外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○受部はやや外上方へ伸び、端部が丸く終わる。受部とたちあがり部の境がわずかに凹む。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面の約3/5 は回転ヘラケズリ。ロクロの回転は左まわり。 ○底部内面の仕あげナデは不明。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○A地区出土。 ○底部外面にヘラ記号。2本の並行線。

器種	器形	番号	法　量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備　　考
須恵器	杯身	21	○口 12.8（復） ○高　5.4	○たちあがりは長い。内傾した後、外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○体部は深い。 ○受部は水平方向に伸び、端部が丸く終わる。受部とたちあがり部の境がわずかに凹む。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面の約1/2 は回転ヘラケズリ。ロクロの回転方向は不明。 ○底部内面は回転ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○Ａ地区出土。 ○底部外面に自然釉がかかる。
		22	○口 14.2（復） ○高　3.3（残）	○たちあがりは短く内傾する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○受部はやや外上方へ伸び、端部が尖り気味に終わる。受部とたちあがり部の境が凹む。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面の約2/3 は回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○底部内面の仕あげナデは不明。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。 ○Ａ地区出土。
		23	○口 12.9（復） ○高　3.9（残）	○たちあがりはやや長い。ゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○体部はやや深い。 ○受部は水平方向に伸び、端部がやや尖り気味に終わる。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面は約4/5 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○底部内面は仕あげナデ。	○精緻。１㎜大の石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○Ａ地区出土。
		24	○口 12.9（復） ○高　2.7（残）	○たちあがりは短い。内傾した後、外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○受部は水平方向に伸び、端部は丸く終わる。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面の回転ヘラケズリは不明。 ○底部内面の仕あげナデは不明。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○Ａ地区出土。
		25	○口 11.9 ○高　4.3	○たちあがりは長い。内傾した後、外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○体部はやや深い。 ○受部は水平方向に伸び、端部が尖り気味に終わる。受部とたちあがり部の境がわずかに凹む。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面は約2/3 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○底部内面は仕あげナデ。	○精緻。１～２㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。 ○Ａ地区出土。 ○受部と底部外面には重ね焼した際に熔着した土器を打ち割った痕跡が残る。 ○底部外面にヘラ記号。１本の直線。

器種	器形	番号	法 量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備　考
須恵器	杯身	26	○口 12.8 ○高 5.1	○たちあがりは長い。内傾した後、外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○体部は深い。 ○受部はやや外上方へ伸び、端部が尖り気味に終わる。受部とたちあがり部の境が凹む。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面は約2/3 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○底部内面は回転ナデ。	○精緻。1㎜大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○Ａ地区出土。
		27	○口 13.1（復） ○高 3.6（残）	○たちあがりは短く内傾する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○受部は水平方向に伸び、端部が丸く終わる。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面は約1/2 を回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○底部内面の仕あげナデは不明。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○Ａ地区出土。
		28	○口 13.1（復） ○高 2.8（残）	○たちあがりは短い。内傾した後、外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○受部は水平方向に伸び、端部が丸く終わる。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面の回転ヘラケズリは不明。 ○底部内面の仕あげナデは不明。	○精緻。1～3㎜の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○Ａ地区出土。
		29	○口 13.0（復） ○高 3.7（残）	○たちあがりは短く内傾する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○受部は水平方向に伸び、端部が丸く終わる。	○たちあがり部は回転ナデ。 ○底部外面の約2/3 は回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○底部内面の仕あげナデは不明。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。 ○Ａ地区出土。
		30	○口 9.2（復） ○高 3.0	○底部は平底である。 ○体部は内弯気味に伸び口縁部がやや内傾する。 ○口縁端部は丸く終わる。	○内外面は回転ナデ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。 ○Ａ地区出土。
	高杯	31	○口 11.9（復） ○高 16.6 ○底 10.2（復）	○杯部は深く、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。 ○脚部は細長く、ゆるく裾広がりになる。端部は面をもつ。 ○脚部には２段の長方形の透を３方向に穿つ。	○杯底部外面は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ○脚部内外面は回転ナデ。 ○杯部は２条の凸帯によって区画し、ヘラ描き列点文を施す。 ○脚部には２条の凹線を施す。	○精緻。1～2㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○Ａ地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	高杯	32・32'	○口 10.9（復） ○高 13.2（推） ○底 9.2（復）	○杯底部はゆるく弯曲し、口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。 ○口縁部と体部の境に稜がつく。 ○脚部は細長く裾部に向かって八字形に開いた後、ゆるく外反する。裾部に稜がつく。端部は丸く終わる。 ○脚部には2段の三角形の透を3方向に穿つ。透の表は面取りする。	○杯部内外面は回転ナデ。 ○脚部外面の中位はカキメ。他は回転ナデ。 ○杯部外面には櫛描き列点文を施す。 ○脚部には2条の凹線を施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗青灰色。 ○A地区出土。
		33・33'	○口 9.4（復） ○高 12.8（推） ○底 9.4（復）	○杯底部はゆるく弯曲し、口縁部が外反する。口縁端部は丸く終わる。 ○口縁部と体部の境にゆるい稜がつく。 ○脚部は細長く、ゆるく裾広がりになる。端部は外側へ肥厚し、丸く終わる。 ○脚部には2段の台形の透を3方向に穿つ。透の表は面取りする。	○杯底部内面は仕あげナデ。他は回転ナデ。 ○杯部外面にはヘラ描き列点文を施す。 ○脚部には2条1対の凹線を2ヶ所に施し、区画する。凹線間には櫛描き波状文と列点文を施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○赤灰色。 ○A地区出土。
		34	○口 12.4 ○高 4.6（残）	○杯底部はゆるく弯曲し、口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終わる。	○内外面は回転ナデ。 ○外面に2条の凸帯を施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡灰色。 ○A地区出土。
		35	○高 10.8（残） ○底 9.4（復）	○杯部を欠損する。 ○脚部は細長く、ゆるく裾広がりになる。 ○端部はやや上方へ拡張し、面をもつ。 ○脚部に透を施す。	○脚部外面の上半はカキメ。他は回転ナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗紫灰色。 ○A地区出土。
		36	○高 4.5（残） ○底 9.1（復）	○ゆるく裾広がりになる脚部である。 ○端部は丸く終わる。 ○脚部に透を施す。	○内外面は回転ナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○A地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	高杯	37	○高 6.8（残） ○底 11.3	○ゆるく裾広がりになる脚部である。 ○端部は丸く終わる。 ○脚部に透を施す。	○内外面は回転ナデ。 ○脚部外面に3条の凹線を施す。	○精緻。1～4㎜の石英、長石を含む。 ○淡灰色。 ○A地区出土。
		38	○口 16.3（復） ○高 6.6（残）	○深い椀状を呈する杯部である。 ○口縁部はゆるく外反し、口縁端部は丸く終わる。 ○杯部外面に把手の剝離した痕跡あり。	○杯底部は回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。 ○杯部外面は2条の凸帯で区画し、凸帯間に櫛描き波状文を2帯施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○A地区出土。
	甕	39・39'	○口 16.6 ○高 20.0（推）	○底部は丸底であり、体部がやや扁球形を呈する。 ○頸部は長く逆八字形に伸び、口縁部が外上方へ広がる。 ○口縁端部は上方に面をもつ。 ○体部中位に斜め方向の円孔を1孔穿つ。	○体部と頸部上半の外面はカキメ。他は回転ナデ。 ○頸部と口縁部の境に1条の凸帯を施す。 ○頸部に2条1対と体部に2条の凹線を施す。 ○口縁部、頸部、体部の外面3ヶ所にヘラ描き列点文を施す。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗青灰色。 ○A地区出土。
	甕	40	○口 15.1（復） ○高 1.8（残）	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は上方へ拡張し、つまみ上げ気味に終わる。	○内外面は回転ナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○A地区出土。
		41	○口 15.5（復） ○高 2.2（残）	○頸部が逆八字形に伸び、口縁部が外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○内外面は回転ナデ。 ○頸部に3条の凹線を施す。	○精緻。1㎜大の石英、長石を含む。 ○灰色。 ○A地区出土。
	壺脚部	42	○高 3.5（残） ○底 12.9	○壺の脚部と考えられる。 ○裾部が八字形に伸びた後、稜を境にして外反する。 ○端部は面をもつ。	○内外面は回転ナデ。	○精緻。1㎜大の石英、長石を含む。 ○青灰色。 ○A地区出土。
	無頸壺	43	○口 —— ○高 9.1（残）	○口縁部を欠損する。 ○丸底の底部より、体部がやや扁球形を呈する。	○体部下半の外面約1/2は回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。他は回転ナデの後、部分的なカキメ。 ○体部内面は回転ナデ。 ○体部外面の中位に1条の凹線を施す。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○A地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	無頸壺	44	○口 ― ○高 8.8（残）	○口縁部を欠損する。 ○丸底の底部より、体部がやや扁球形を呈する。	○風化が著しく調整法は不明。 ○体部外面に2条の凹線を施す。	○粗。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○桃褐色。 ○A地区出土。
	脚付無頸壺	45	○口 7.0（復） ○高 8.9（残）	○体部は扁球形を呈する。 ○口縁部は短く外反し、口縁端部が丸く終わる。 ○脚部は大部分を欠損するが3方向に透を施す。	○体部下半の外面約1/2は回転ヘラケズリ。ロクロの回転は右まわり。他は回転ナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○暗青灰色。 ○A地区出土。
	長頸壺	46	○口 8.0 ○高 6.5（残）	○細長く外上方へ伸びる頸部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。	○内外面は回転ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗青灰色。 ○A地区出土。
		47	○口 9.3 ○高 6.5（残）	○細長く外上方へ伸びる頸部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。	○頸部外面の下半はカキメ。他は回転ナデ。 ○頸部外面に2条の凹線を施す。	○精緻。1㎜大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。 ○A地区出土。
	脚付有蓋壺	48・48'	○口 11.6（復） ○高 31.6（推） ○底 16.6	○体部はやや扁球形を呈する。 ○頸部は逆八字形に開き、頸部と口縁部の境に受部がつく。受部は水平方向に伸びる。 ○口縁部は内傾し、口縁端部の内面に浅い凹線を施す。 ○脚部は八字形に開き、裾部で内弯する。端部は面をもつ。 ○脚部は3方向に3段の透を施す。上段が長方形、中下段が三角形。	○体部外面はカキメ。内面は回転ナデ。 ○口頸部は頸部外面の上位をカキメ。他は回転ナデ。 ○脚部外面の上位はカキメ。他は回転ナデ。 ○体部外面は2条の凹線で区画し、2帯の櫛描き列点文を施す。 ○脚部外面は4条の凹線（中段は2条1対）で区画し、3帯の櫛描き波状文を施す。 ○頸部外面は1帯の櫛描き波状文が残存。	○精緻。1～2㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。 ○A地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	脚付子持壺	49・49'	○口 18.6 ○高 36.8（推） ○底 21.4（復）	○体部はほぼ球形を呈する。 ○頸部は大きく逆八字形に開き、さらに口縁部が外反する。頸部と口縁部の境に稜がつく。 ○口縁端部は面をもつ。 ○脚部は内弯しながら、八字形に開く。 ○端部は面をもつ。 ○脚部の4方向に3段の台形の透を施す。	○体部下半と脚部上半の外面はカキメ。他は回転ナデ。 ○脚部と体部の境に1条の凸帯を施す。 ○頸部外面は1条、体部外面は2条、脚部外面は3条（上段2条1対）の凹線を施す。 ○肩部には小形壺1と剝離痕4が残る。剝離痕は大小が交互に配置され、それぞれ4個あったと考えられる。	○精緻。1～2㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗青灰色。 ○A地区出土。
	器台	50	○口 29.3 ○高 49.8 ○底 24.8	○杯底部はゆるく弯曲し、口縁部が外反する。口縁端部は面をもつ。 ○脚部は上半が柱状を呈し、下半が裾広がりになる。裾部でやや内弯する。端部は面をもつ。 ○脚部には上より円形（1段）、長方形（4段）三角形（2段）の順で透を施す。円形を3方向配し、その間に長方形と三角形を交互に施す。	○杯底部外面はタタキの後、カキメ。内面に当て具痕が残る。他は回転ナデ。 ○脚部内外面は回転ナデ。 ○杯部と脚部の境には1条の凸帯を施し、キザミ目を入れる。 ○杯部外面には2条の凹線。脚部外面は6ヶ所の凹線（2段目が4条1対、他は2条1対）で区画し、杯部に1帯、脚部に5帯のヘラ描き列点文を施す。	○精緻。1～3㎜の石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○A地区出土。
		51	○高 20.7（残） ○底 28.9（復）	○上部が柱状を呈し、裾部がやや内弯気味に広がる。端部は面をもつ。 ○脚部には透を施し、上が長方形、下が台形を呈すると考えられる。	○脚部内外面は回転ナデ。 ○脚部には2ヶ所に凹線を施し、上が1条、下が3条1対である。	○精緻。1～3㎜の石英、長石を含む。 ○灰色。 ○A地区出土。
		52	○高 8.1（残） ○底 27.0（復）	○八字形に広がる脚部であり、裾部が強く内弯する。端部は面をもつ。	○脚部外面の上位はカキメ。他は回転ナデ。 ○脚部外面は2条の凹線で区画し、2帯の櫛描き波状文を施す。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡茶灰色。 ○A地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	椀	53	○口 9.3（復） ○高 4.7（残）	○体部がやや内弯気味に伸び、口縁部が上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は内傾して、面をもつ。	○内外面は回転ナデ。 ○外面に2条の凸帯を施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○青灰色。 ○A地区出土。
土師器	鉢	54	○高 3.4（残） ○底 6.2	○平底の底部である。 ○体部が外上方へ伸びる。	○外面は風化が著しく、調整法は不明。 ○内面は板ナデ。	○粗。1㎜大の石英、長石を含む。 ○赤褐色。 ○A地区出土。
	甕	55	○口 11.7（復） ○高 6.3（残）	○張りのある体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメ。内面はナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○茶褐色。 ○A地区出土。 ○体部外面に黒斑あり。
須恵器	甕	56	○口 22.0 ○高 38.9	○丸底の底部である。 ○底部より約3/5の位置で最大径を有する。体部の張りは大きい。 ○口縁部は大きく外反し、口縁端部が幅広の面をもつ。	○口縁部外面は回転ナデの後、部分的なカキメ。内面は回転ナデ。 ○体部外面は擬格子のタタキの後、部分的なハケメ。 ○体部内面には当て具痕が残る。	○精緻。1～2㎜大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。 ○A地区出土。 ○底部と体部外面には焼成時に熔着した土器片が残る。
		57	○口 ―― ○高 55.1（残）	○丸底の底部である。 ○底部より約2/3の位置で最大径を有する。体部の張りは大きい。	○体部外面は擬格子のタタキの後、部分的なカキメ。 ○体部内面には当て具痕が残る。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰色。 ○A地区出土。
瓦器	椀	58	○口 13.5 ○高 4.0 ○底 4.9	○平底の底部より、体部が内弯気味に立ち上がる。 ○口縁部はゆるく外反し、口縁端部に沈線を施す。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○外面は指押えの後、口縁部付近を粗いヘラミガキ。 ○内面はやや密なヘラミガキ。 ○見込みの暗文は風化が著しく不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○A地区出土。
		59	○口 14.2（復） ○高 4.6 ○底 4.5（復）	○形態は58と同様であるが、高台がやや高い。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○乳灰色。 ○B地区出土。

器種	器形	番号	法 量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備　考
瓦器	椀	60	○口 14.9（復） ○高 4.2（残）	○形態は58と同様。	○外面は風化が著しく調整法は不明。 ○内面はヘラミガキ。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○Ｂ地区出土。
		61	○口 15.2（復） ○高 3.9（残）	○形態は58と同様。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○Ａ地区出土。
		62	○口 13.5（復） ○高 2.3（残）	○形態は58と同様。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○乳灰色。 ○Ｂ地区出土。
		63	○口 13.7（復） ○高 3.3（残）	○内弯気味に立ち上がる体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○乳灰色。 ○Ｂ地区出土。
土師器	羽釜	64	○口 26.6（復） ○高 6.4（残）	○体部の張りは少なく、口縁部が強く外折する。 ○口縁端部は内側へ巻き込む。 ○鍔は短く、断面形が台形を呈する。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。1～2㎜の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○乳褐色。 ○Ａ地区出土。
		65	○口 21.8（復） ○高 12.0（残）	○張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。 ○口縁端部は面をもち、中央が凹む。 ○鍔は水平方向に伸び、端部がやや丸く終わる。 ○口縁部に小円孔を穿つ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデの後、下位をヘラケズリ。 ○体部内面はハケメ。	○精緻。1～4㎜の石英、長石を含む。 ○灰褐色。 ○Ａ地区出土。 ○鍔より下の外面に煤が付着。
瓦器	羽釜	66	○口 24.9（復） ○高 5.6（残）	○口縁部は内傾し、口縁端部は面をもつ。 ○鍔はやや外上方へ伸び、端部が丸く終わる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○口縁部外面に1条の凹線を施す。	○精緻。1㎜大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰褐色。 ○Ｂ地区出土。 ○鍔より下の外面に煤が付着。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜	67	○口 22.4（復） ○高 5.3（残）	○形態は66とほぼ同様であるが、口縁端部の中央が凹む。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はハケメ。 ○口縁部外面に1条の凹線を施す。	○精緻。1㎜大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰褐色。 ○A地区出土。 ○鍔より下の外面に煤が付着。
		68	○口 30.6（復） ○高 12.3（残）	○形態は67と同様。	○調整は67と同様。 ○口縁部外面に2条の凹線を施す。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○灰褐色。 ○A地区出土。
		69	○口 28.9（復） ○高 7.8（残）	○口縁部はゆるく内弯する。 ○口縁端部は面をもち、中央が凹む。 ○鍔は欠損する。	○風化が著しく調整法は不明。 ○口縁部外面に3条の段をもつ。	○粗。1～8㎜の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○A地区出土。
		70	○口 20.6（復） ○高 5.4（残）	○形態は66と同様。	○調整は66と同様。 ○口縁部外面に2条の凹線を施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。 ○B地区出土。
		71	○口 19.4（復） ○高 3.2（残）	○口縁部は短く内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鍔は短く水平方向に伸び、端部が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。	○粗。1㎜大の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○A地区出土。
		72	○高 7.2（残）	○棒状を呈する脚である。	○外面はナデ。	○精緻。1㎜大の石英、長石を含む。 ○黒褐色。 ○B地区出土。
		73	○高 9.0（残）	○形態は72と同様。	○調整は72と同様。	○精緻。1～3㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰白色。 ○A地区出土。
		74	○口 26.0（復） ○高 7.0（残）	○形態は67と同様。	○調整は67と同様。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○灰褐色。 ○B地区出土。 ○鍔より下の外面に煤が付着。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜	75	○口 24.8（復） ○高 5.1（残）	○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鍔は水平方向に伸び、端部が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。内面はハケメ。 ○口縁部外面に3条の段をもつ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○A地区出土。
		76	○口 25.6（復） ○高 4.6（残）	○形態は75と同様。	○調整は75と同様。 ○口縁部外面に3条の段をもつ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○B地区出土。
		77	○口 25.7（復） ○高 4.9（残）	○形態は75と同様。	○調整は75と同様。 ○口縁部外面に3条の段をもつ。	○精緻。1～3㎜の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○B地区出土。
		78	○口 27.8（復） ○高 5.6（残）	○形態は75と同様。	○調整は75と同様。 ○口縁部外面に3条の段をもつ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
		79	○口 28.9（復） ○高 6.6（残）	○形態は75と同様。	○調整は75と同様。 ○口縁部外面に2条の段をもつ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
土師器	皿	80	○口 9.2（復） ○高 2.5	○平底の底部より、口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。1㎜大の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡茶褐色 ○B地区出土。
		81	○口 8.1（復） ○高 1.5	○平底の底部より、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終わる。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡褐色。 ○A地区出土。
	香炉	82	○口 11.7（復） ○高 4.6	○平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。 ○口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終わる。 ○底部に短い脚がつく。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。1～2㎜の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○桃褐色。 ○A地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	青磁椀	83	○高 2.3（残） ○底 5.5（復）	○底部のみ残存。 ○高台は高く、八字形に開く。	○内外面はロクロナデ。 ○体部外面にヘラ描き蓮弁文を施す。 ○底部外面以外は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　淡灰色。 釉　緑色。 ○A地区出土。
陶磁器	伊万里焼椀	84	○口 11.4（復） ○高　5.7（残）	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。	○内外面はロクロナデ。 ○体部に3帯の波状（青色）の図柄を描く。 ○内外面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　白色。 釉　淡青色。 ○A地区出土。
		85	○口 10.2（復） ○高　4.2（残）	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部に至る。 ○口縁端部は丸く終わる。	○内外面はロクロナデ。 ○体部外面に草花（青色）の図柄を描く。 ○内外面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　淡灰色。 釉　淡青灰色。 ○A地区出土。
		86	○高 4.1（残） ○底 4.2（復）	○平底の底部より、体部が内弯気味に立ち上がる。 ○高台は高い。	○内外面はロクロナデ。 ○体部外面に1条、高台外面に2条の直線（青色）を描く。 ○内外面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡青色。 ○A地区出土。
		87	○高 4.2（残） ○底 3.6（復）	○形態は86と同様。	○調整は86と同様。 ○体部と高台の外面に1条づつの直線（青色）を描く。体部上位に斜格子と孤の図柄を描く。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡青灰色。 ○A地区出土。
瓦器	火消壺	88	○口 52.2（復） ○高 13.5（残）	○体部が上方へ伸び、口縁部に至る。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面はハケメの後ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
		89	○高　7.5（残） ○底 21.6（復）	○平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。1㎜大の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
		90	○高 11.2（残） ○底 26.9（復）	○形態は89と同様。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	火消壺	91	○高 10.5（残） ○底 25.0（復）	○形態は89と同様。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
土師器	火舎	92	○口 34.2（復） ○高 28.5 ○底 28.2（復）	○平底の底部より体部が外上方へ伸び、口縁部に至る。 ○口縁端部は面をもつ。	○風化が著しく調整法は不明。 ○口縁部直下に2条の凸帯を貼り付け、その間にスタンプ文様を施す。 ○底部直上に1条の凸帯を貼り付ける。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○赤褐色。 ○B地区出土。
瓦器	火舎	93	○高 10.0（残） ○底 34.3（復）	○平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。 ○底部は逆台形を呈する。短い脚がつく。	○外面はナデ。内面はハケメの後、ナデ。	○粗。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○A地区出土。
須恵器	捏鉢	94	○口 25.7（復） ○高 2.9（残）	○口縁部が逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○B地区出土。
瓦器	摺鉢	95	○口 32.3（復） ○高 7.4（残）	○体部が逆八字形に伸び、口縁部に至る。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押えの後、部分的なハケメ。内面はナデ。 ○体部内面には7条のおろし目を施す。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。 ○B地区出土。
		96	○口 33.1（復） ○高 6.5（残）	○形態は95と同様。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○淡灰色。 ○B地区出土。
		97	○口 34.0（復） ○高 7.8（残）	○形態は95と同様。	○風化が著しく調整法は不明。 ○体部内面におろし目を施す。7条残存。	○粗。1㎜大の石英、長石を含む。 ○淡灰色。 ○B地区出土。
		98	○口 31.8（復） ○高 6.7（残）	○形態は95と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメ。内面はハケメの後ナデ。 ○体部内面におろし目を施す。2条残存。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○赤灰色。 ○B地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	摺鉢	99	○口 27.3（復） ○高 6.6（残）	○形態は95と同様。	○風化が著しく調整法は不明であるが、体部外面にわずかにハケメが残る。 ○体部内面におろし目を施す。3条残存。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
		100	○高 1.7（残） ○底 11.4（復）	○平底の底部である。	○風化が著しく調整法は不明。 ○内面におろし目を施す。9条残存。	○粗。1～2㎜の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
		101	○高 10.1（残） ○底 11.1（復）	○平底の底部より、体部が逆八字形に伸びる。	○風化が著しく調整法は不明。 ○体部内面に7条のおろし目を施す。	○粗。1～2㎜の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
		102	○高 3.8（残） ○底 10.3（復）	○形態は101と同様。	○風化が著しく調整法は不明。 ○体部内面に8条のおろし目を施す。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○A地区出土。
		103	○高 4.5（残） ○底 12.5（復）	○形態は101と同様。	○風化が著しく調整法は不明。 ○体部内面に6条のおろし目を施す。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○B地区出土。
陶磁器	伊万里焼椀	104	○高 2.8（残） ○底 3.7（復）	○平底の底部より、体部が内弯気味に立ち上がる。 ○高台は高く、断面形が逆三角形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○体部外面に1条、高台外面に2条の直線（青色）を描く。 ○内外面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡緑青色。 ○B地区出土。
	皿	105	○高 1.6 ○底 6.1	○平底の底部より、体部がゆるく立ち上がる。 ○高台は高く、断面形が逆三角形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　白色。 釉　灰白色。 ○B地区出土。
	椀	106	○高 1.7（残） ○底 7.0（復）	○高台は高く、断面形が長方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面のみ施釉。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○素地　淡灰色。 釉　淡緑色。 ○A地区出土。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
陶磁器	椀	107	○高 2.0（残） ○底 2.7	○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○高台より上の外面と内面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　白色。 釉　淡青色。 ○Ａ地区出土。
	唐津焼椀	108	○高 1.8（残） ○底 4.4	○高台は高く、断面形が逆台形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面のみ施釉。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○素地　茶色。 釉　緑灰色。 ○Ｂ地区出土。
		109	○高 3.5（残） ○底 4.5（復）	○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面と外面の上位は施釉。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○素地　淡茶灰色。 釉　緑灰色。 ○Ｂ地区出土。
	美濃・瀬戸焼椀	110	○高 2.2（残） ○底 5.6	○高台は低く、断面形が逆台形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面は施釉。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○素地　黄灰色。 釉　茶色。 ○Ｂ地区出土。
	唐津焼椀	111	○高 1.8（残） ○底 4.0	○高台は低く、断面形が逆台形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面のみ施釉。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○素地　淡茶色。 釉　茶灰色。 ○Ｂ地区出土。
		112	○高 1.7（残） ○底 4.5	○高台は低く、断面形が逆台形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面のみ施釉。 ○底部は糸切り。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○素地　淡茶灰色。 釉　淡緑灰色。
	甕	113	○高　7.6（残） ○底 12.8（復）	○平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。	○内外面はロクロナデ。	○精緻。１～３㎜の石英、長石を含む。 ○淡紫灰色。 ○Ｂ地区出土。

神並古墳群遺跡第3次発掘調査報告

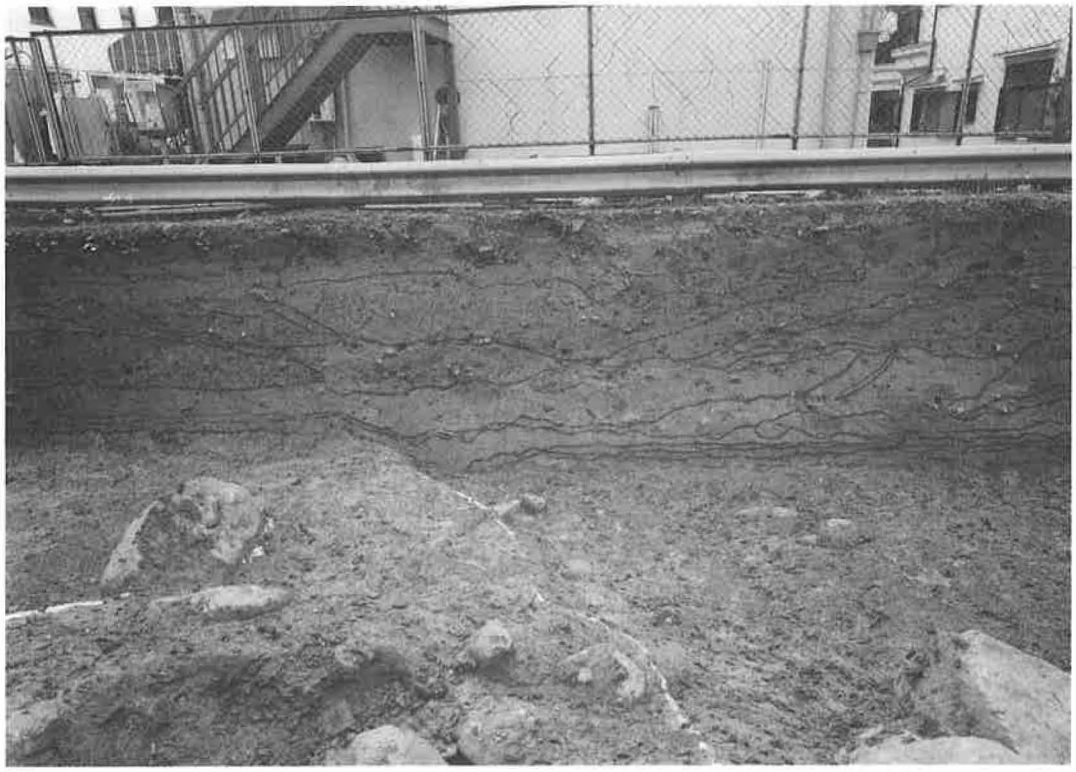
1990年2月

発行　財団法人 東大阪市文化財協会

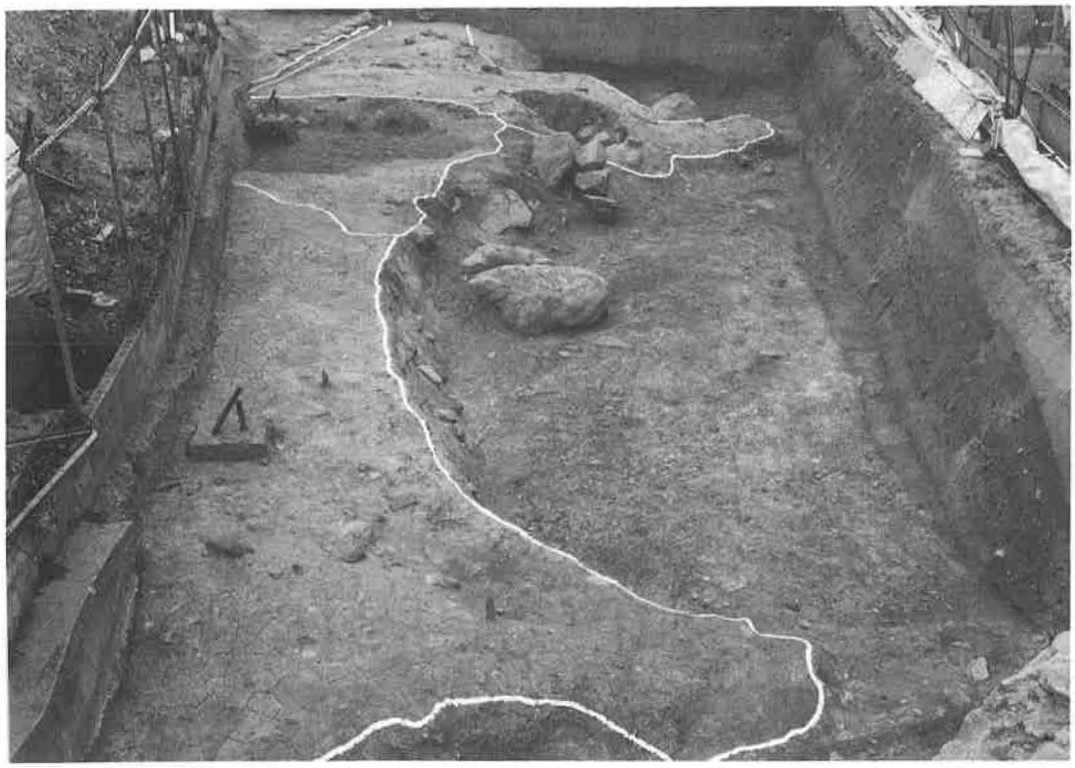
印刷　株式会社 中島弘文堂印刷所

図　　版

図版1　遺構



1．南壁断面（A地区）

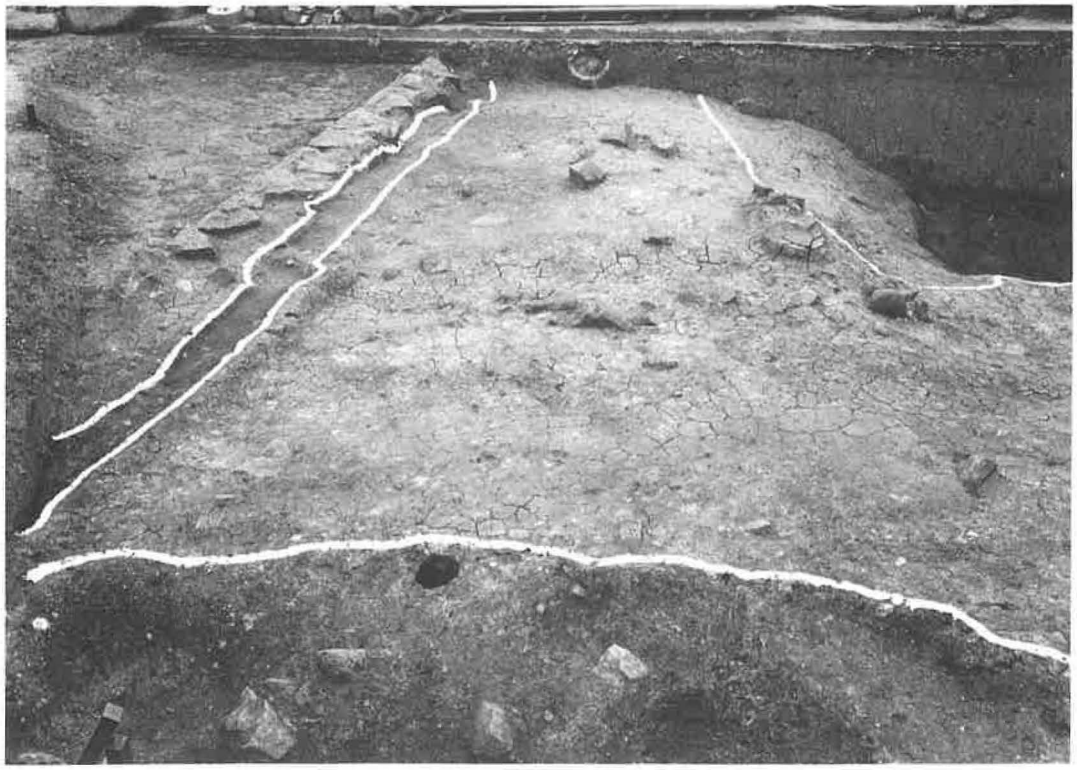


2．池状遺構（A地区）

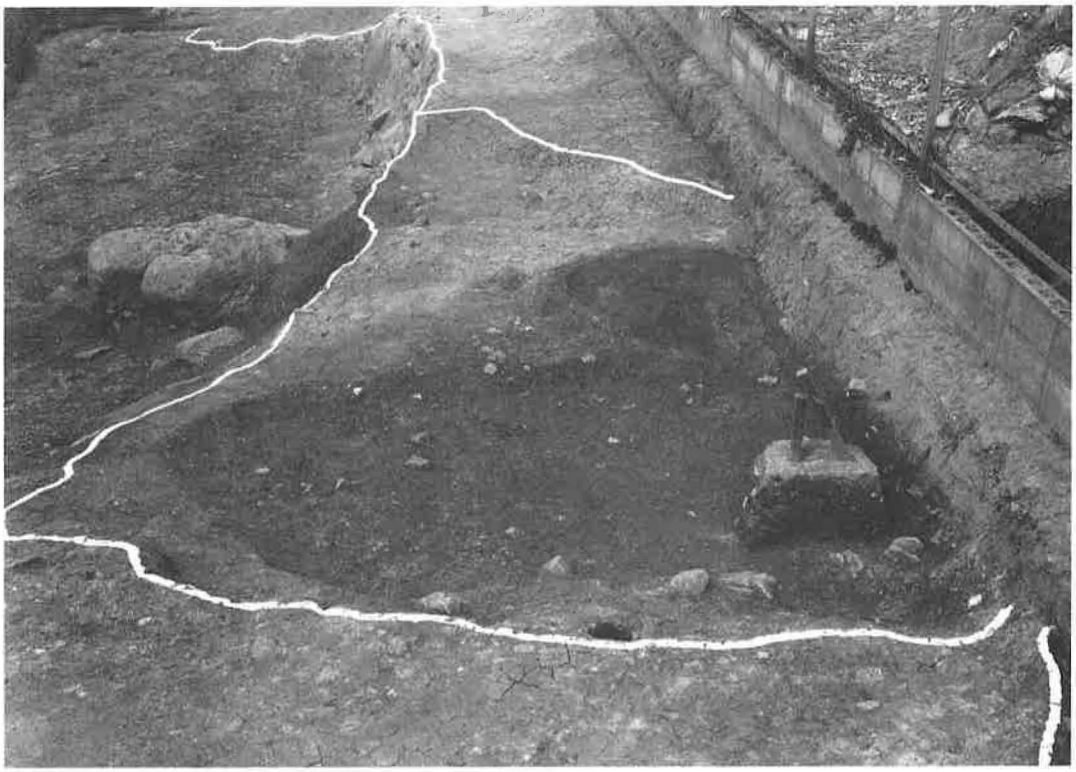
1．池状遺構内集石検出状況（A地区）

2．池状遺構内集石検出状況（A地区）

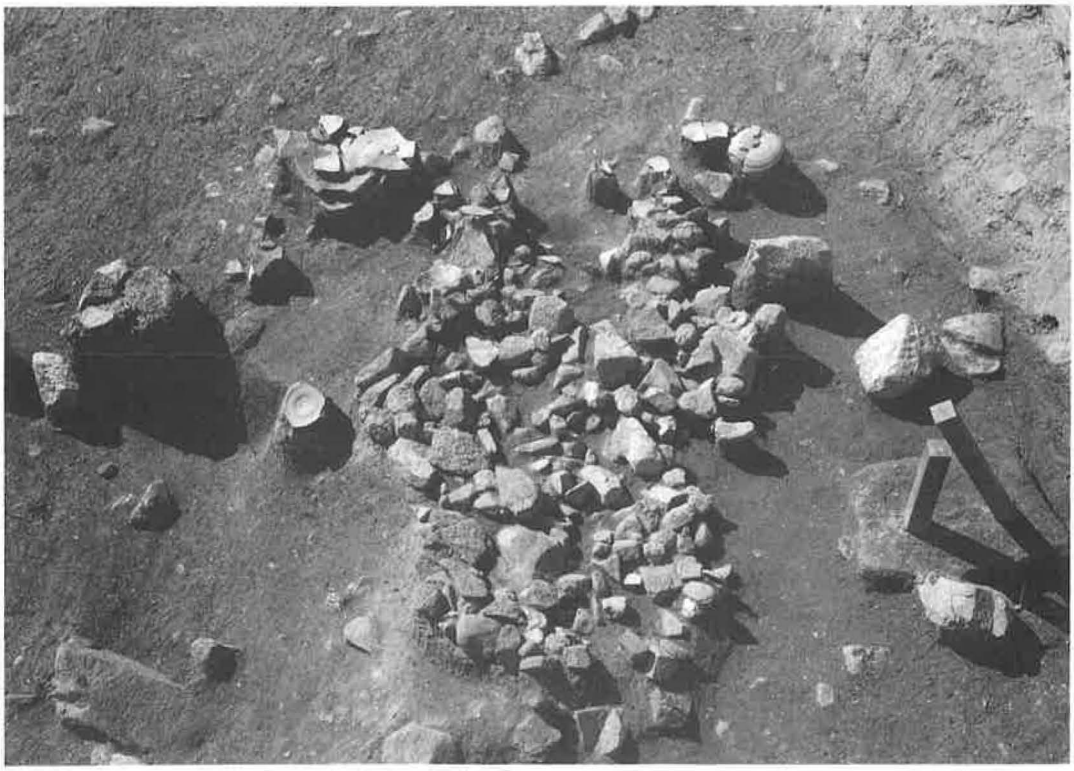
1．遺物出土状況（A地区）



2．溝1（A地区）

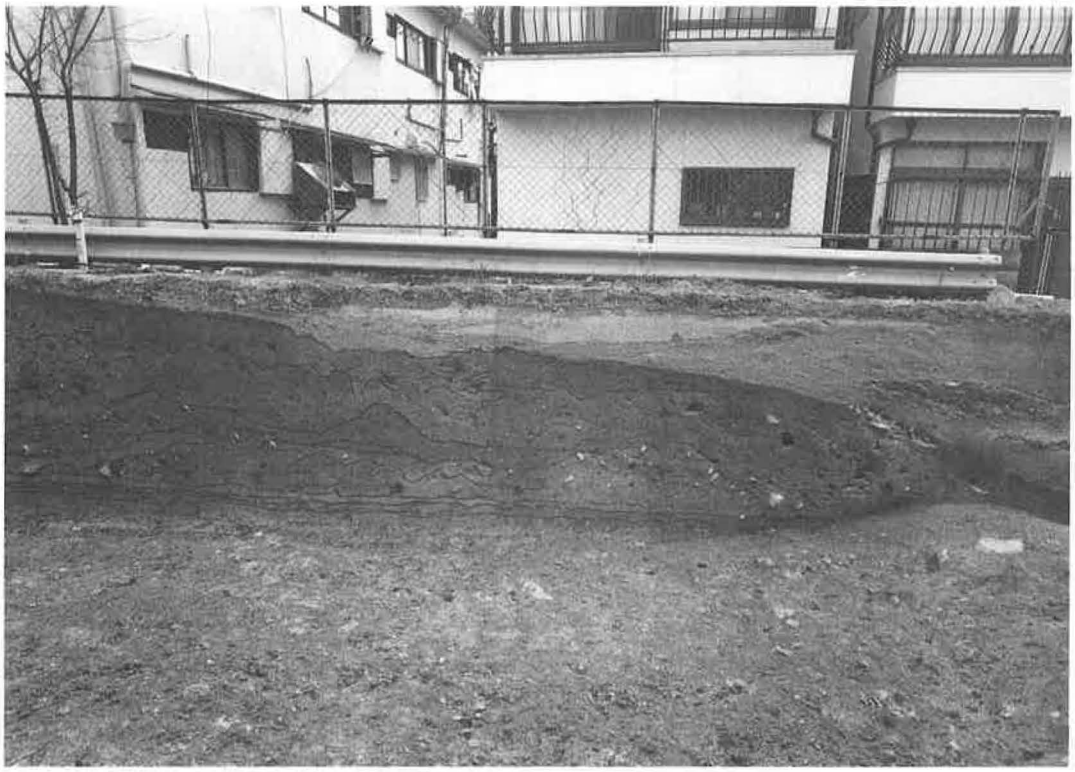


1．落ち込み1（A地区）



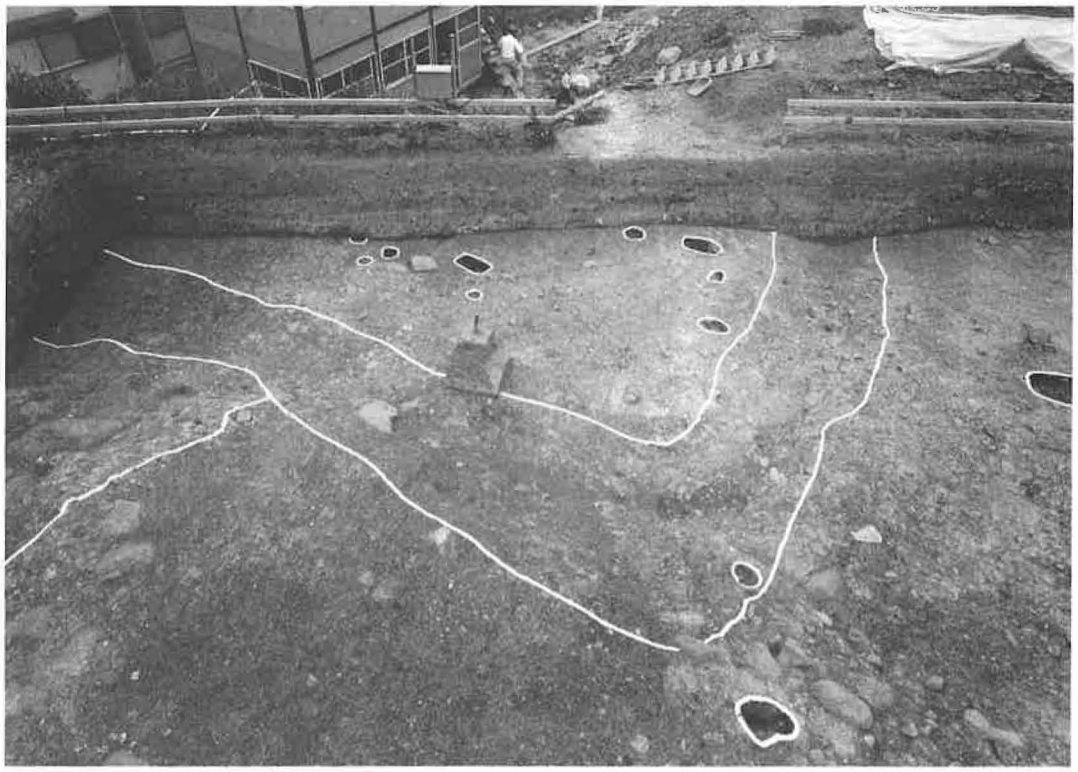
2．落ち込み1内遺物出土状況（A地区）

図版5　遺構

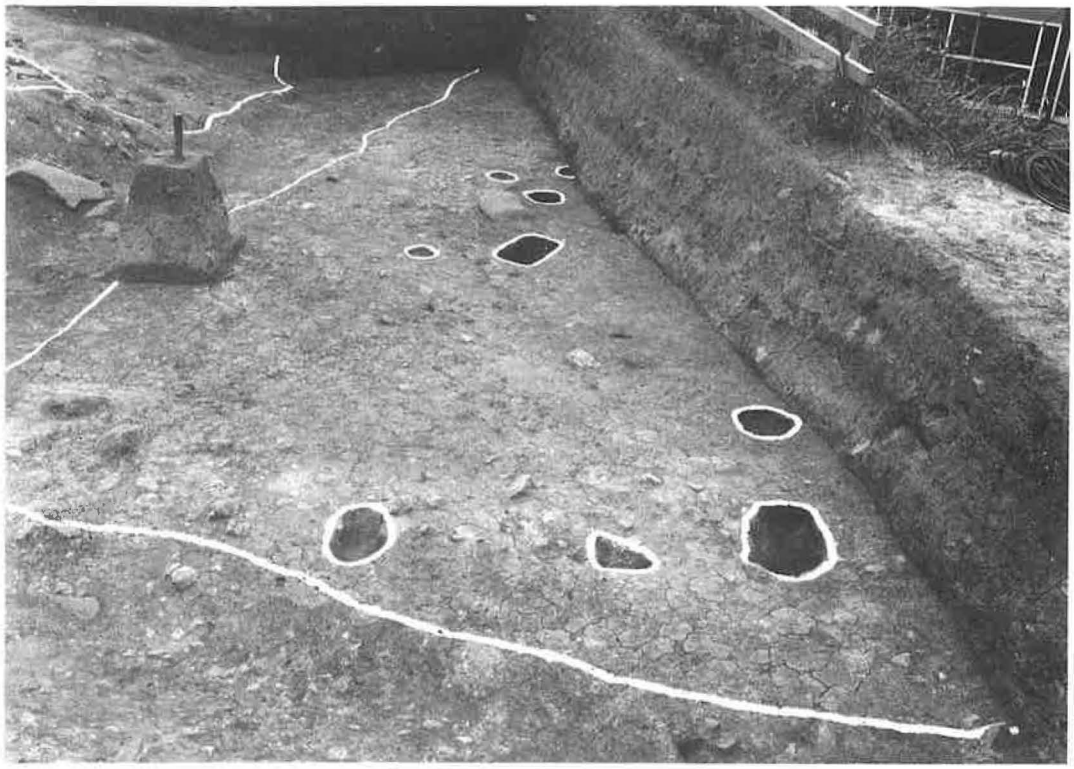


1．南壁断面（B地区）

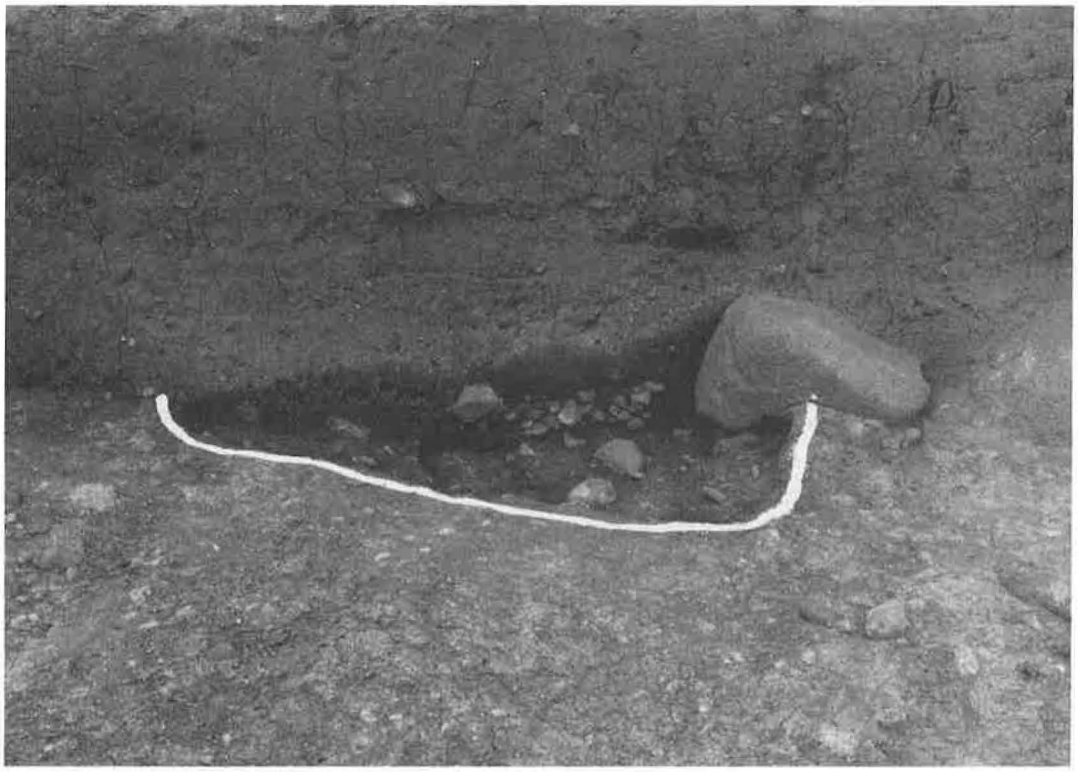
2．遺構全景（B地区）



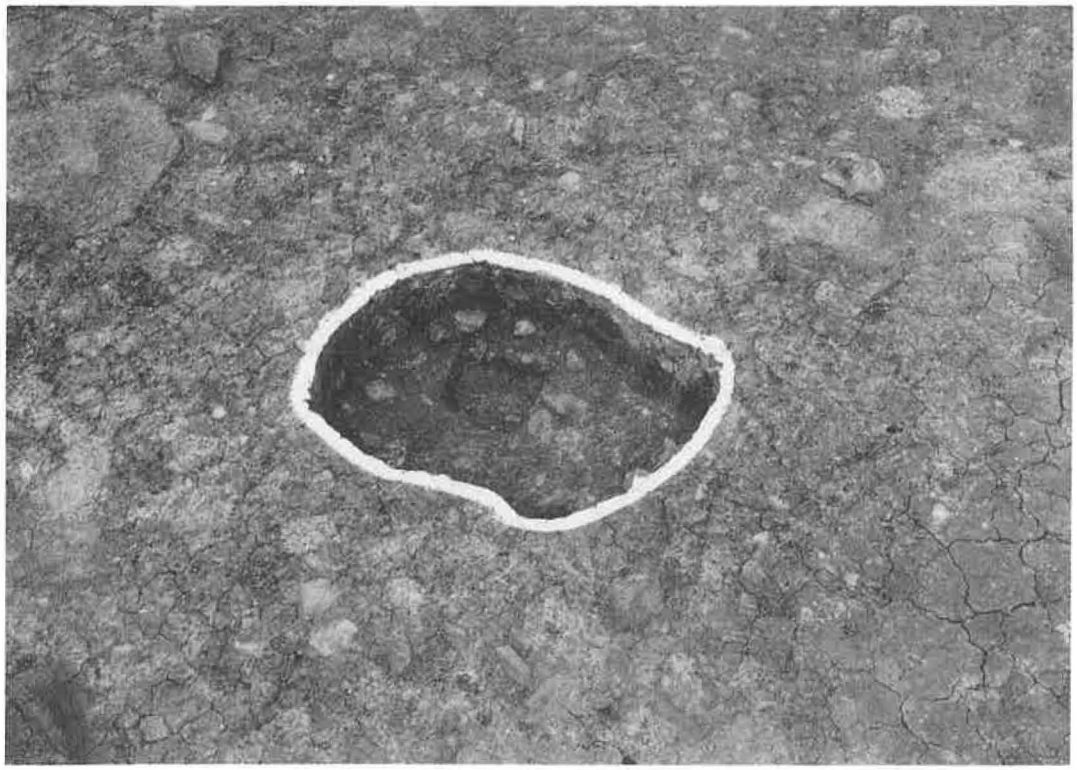
1．溝2・落ち込み2・ピット群（B地区）



2．ピット群（B地区）



1．土坑3（B地区）



2．土坑2（B地区）

14

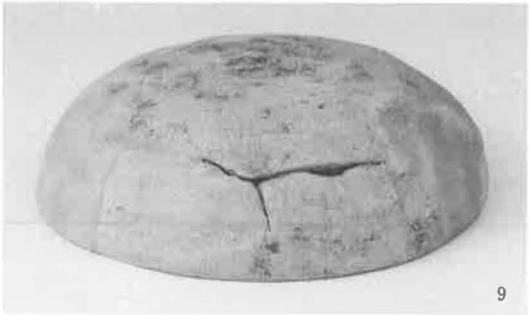
13

10

3

5

4


9

8

7

11

須恵器

21

1

16

27

17

23

18

29

25

26

須恵器

34

31

37

32

33

須恵器

48

49

50

57

須恵器

44

43

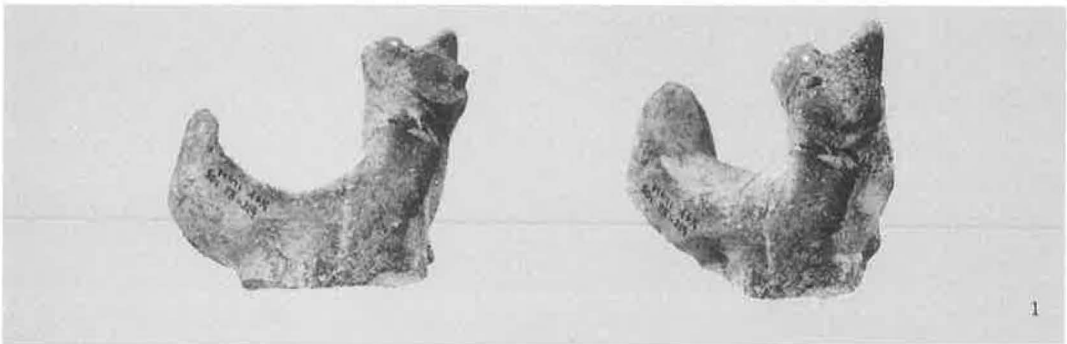
47

45

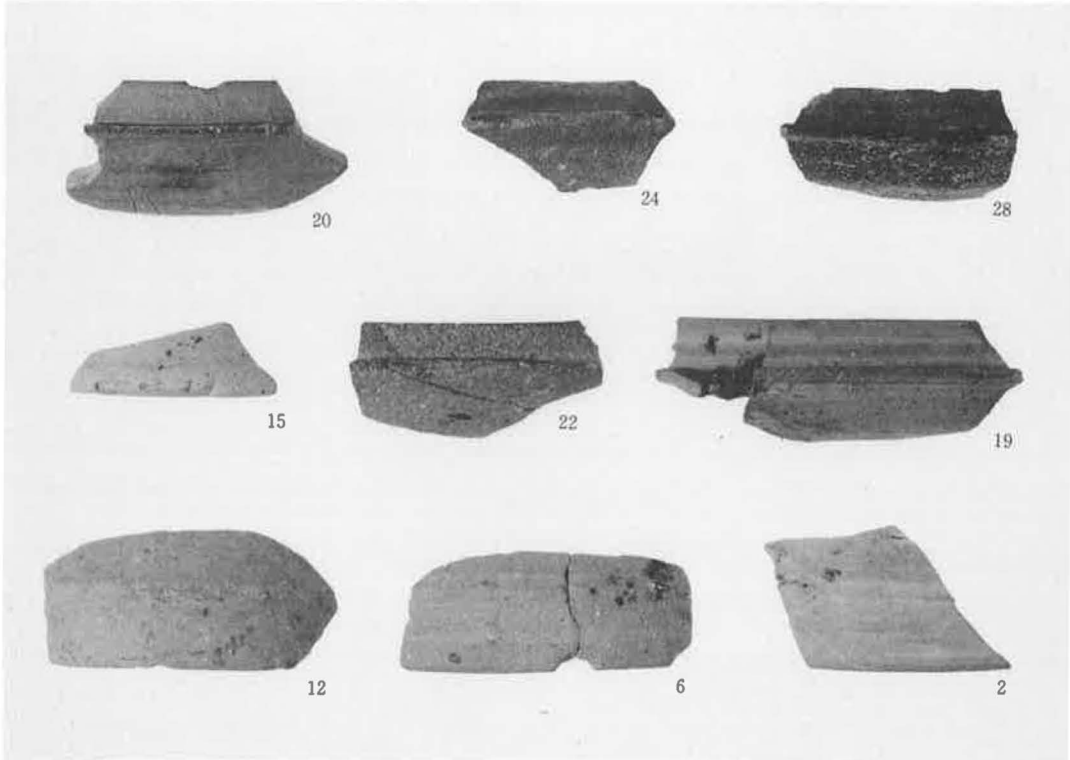
46

56

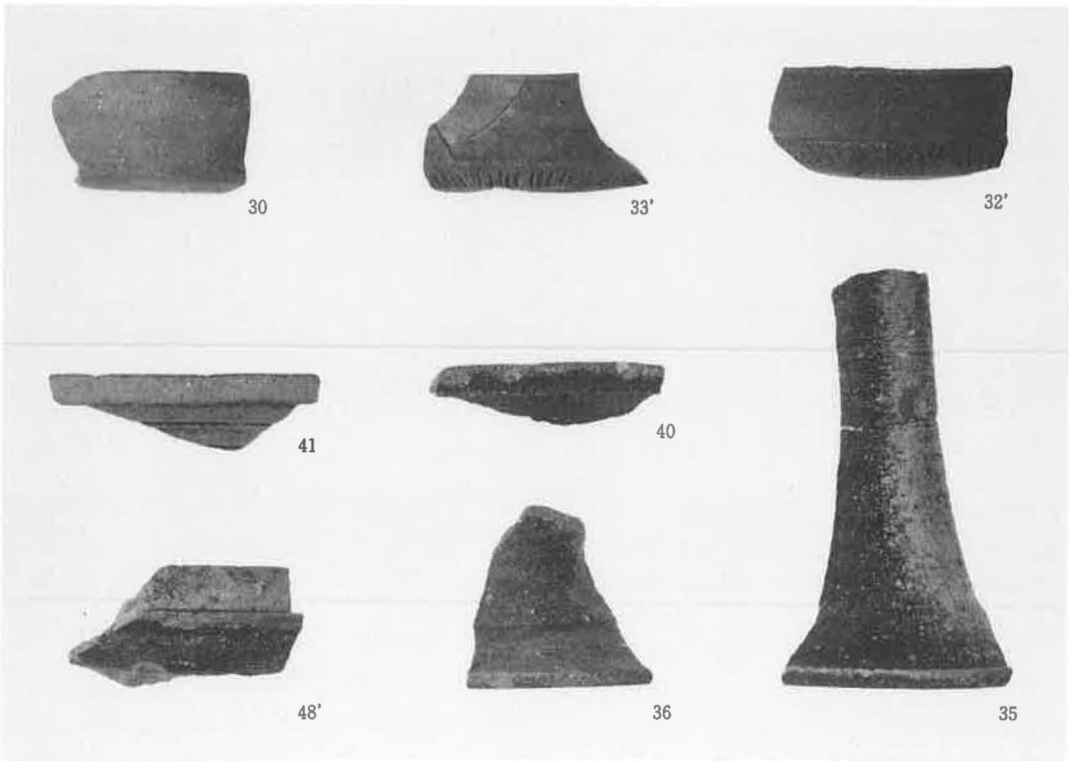
須恵器



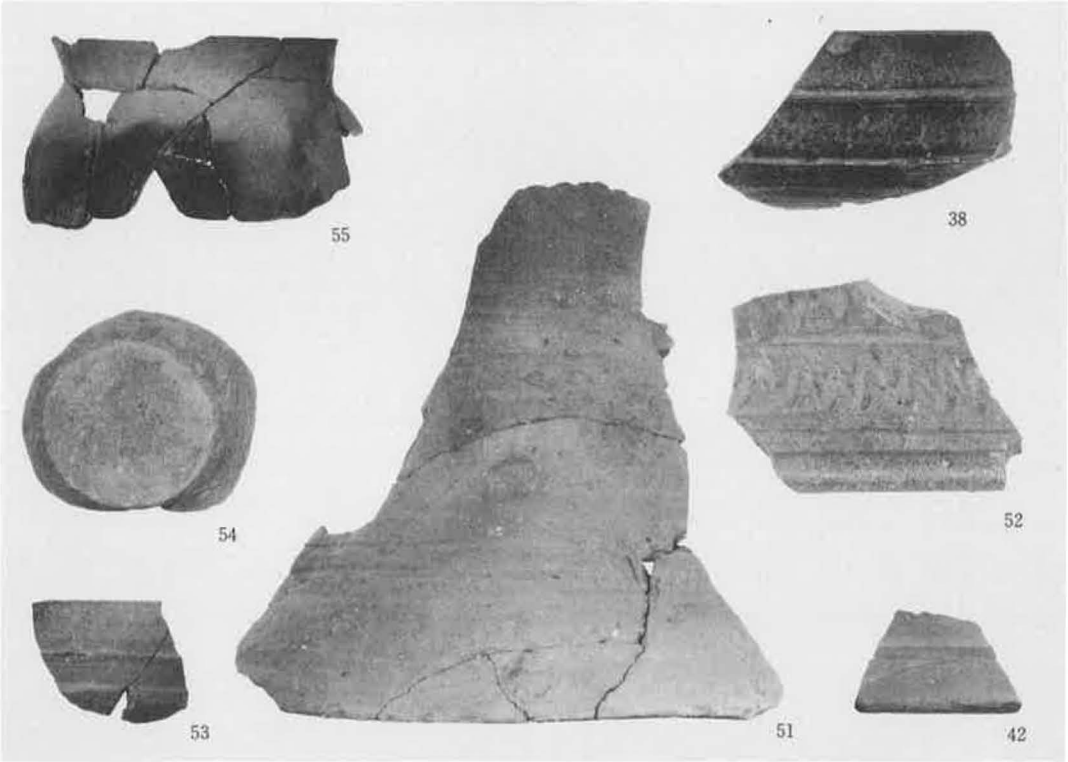
須恵器・土師器・瓦器・装飾壺部品・耳環



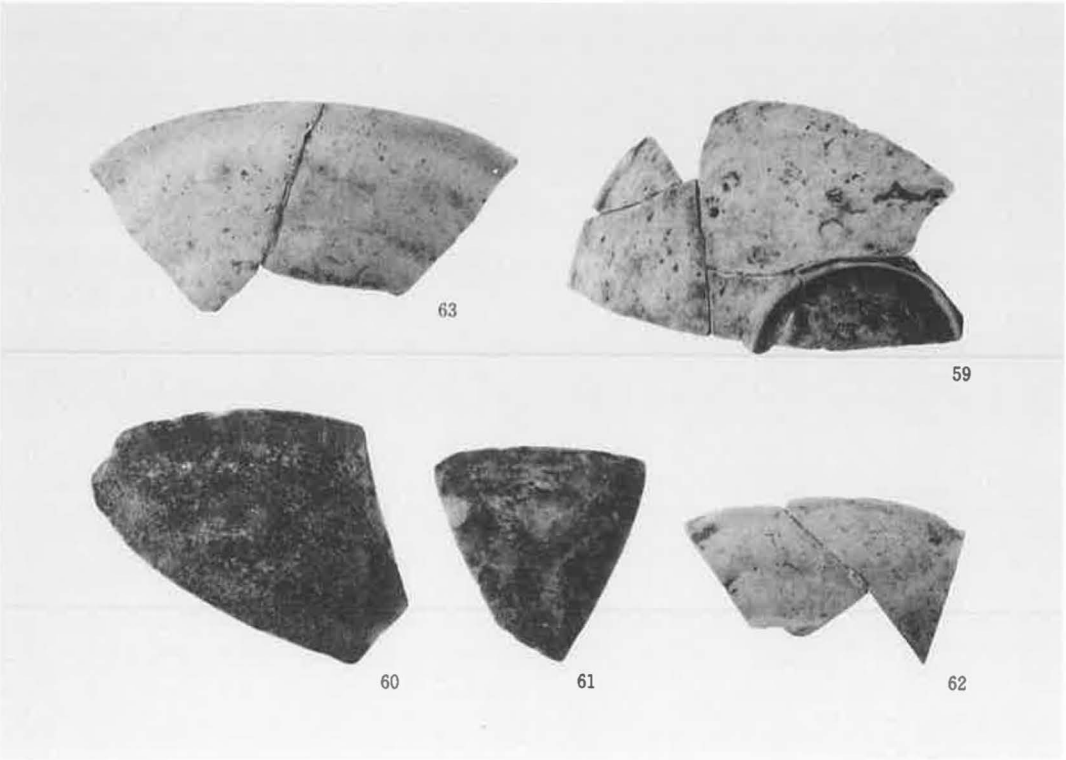
1．須恵器



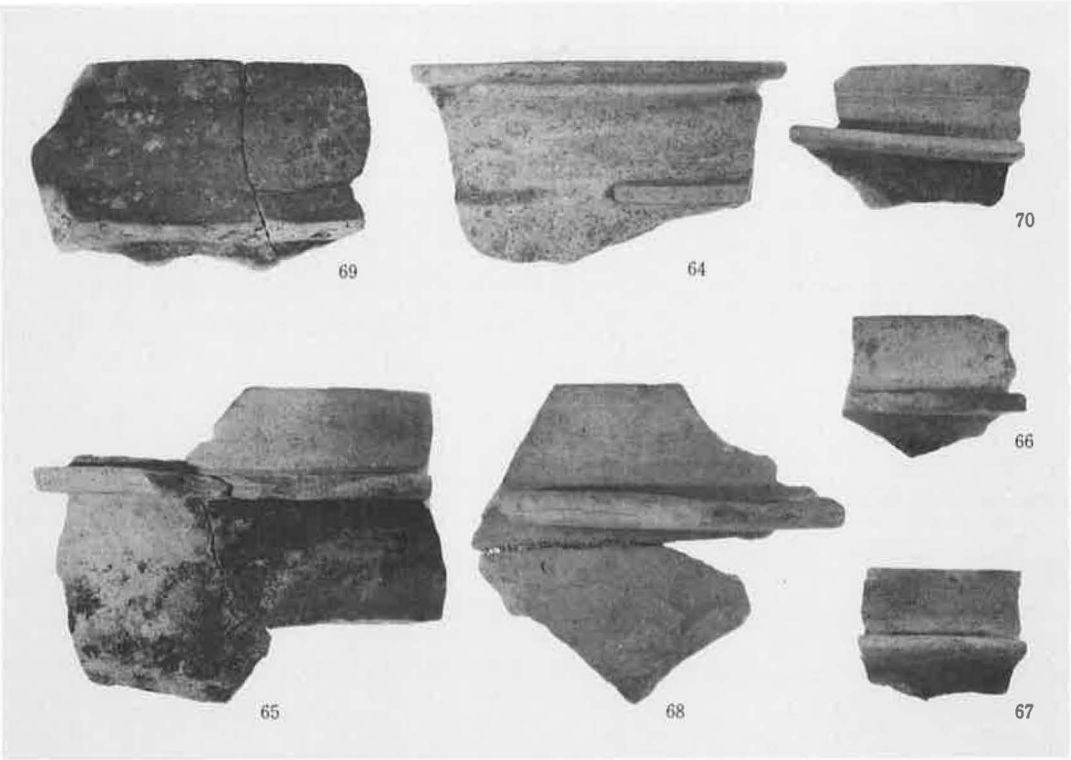
2．須恵器



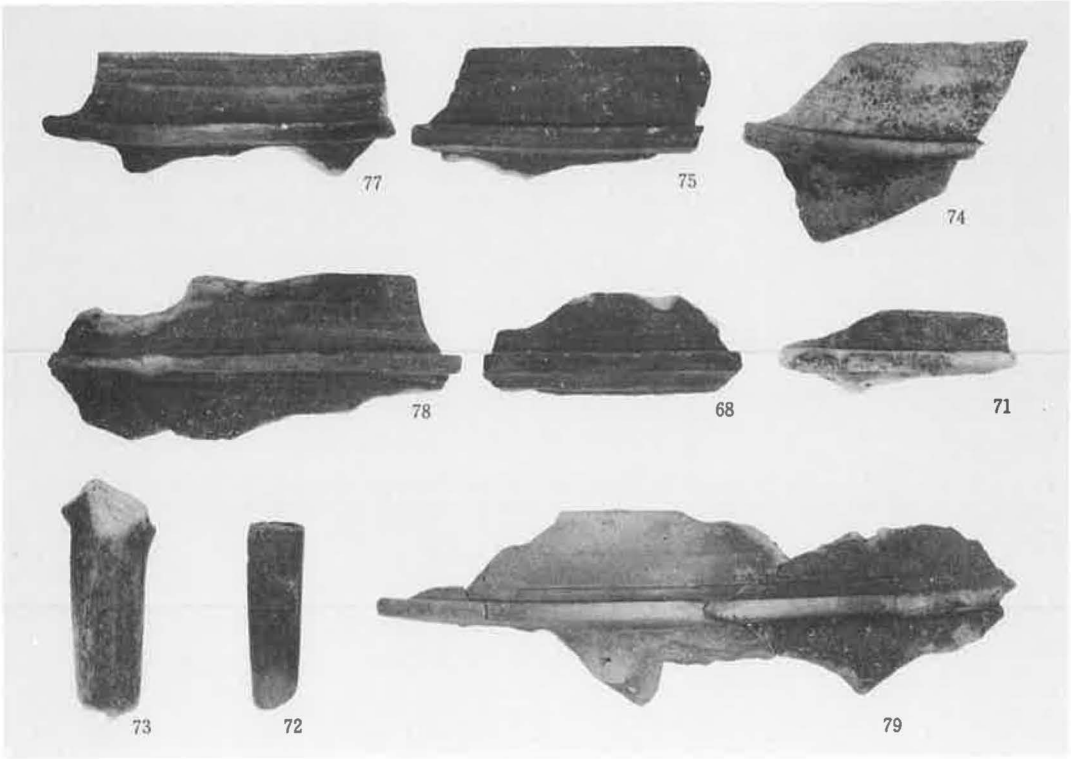
1．須恵器



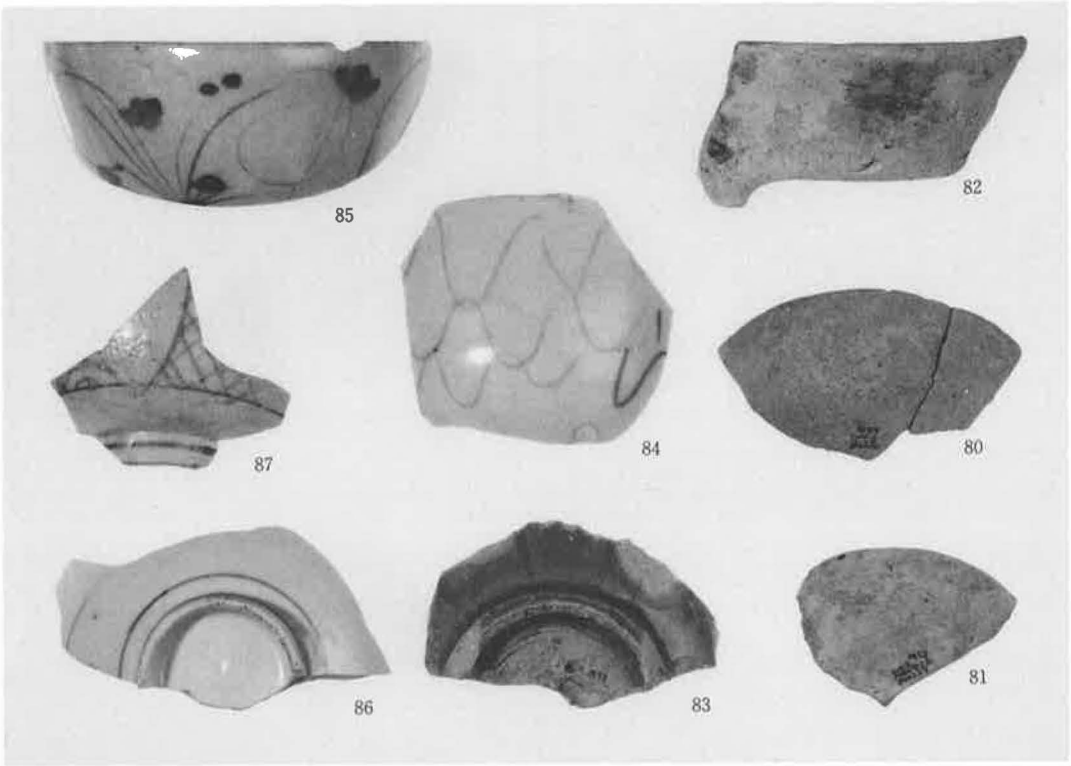
2．瓦器



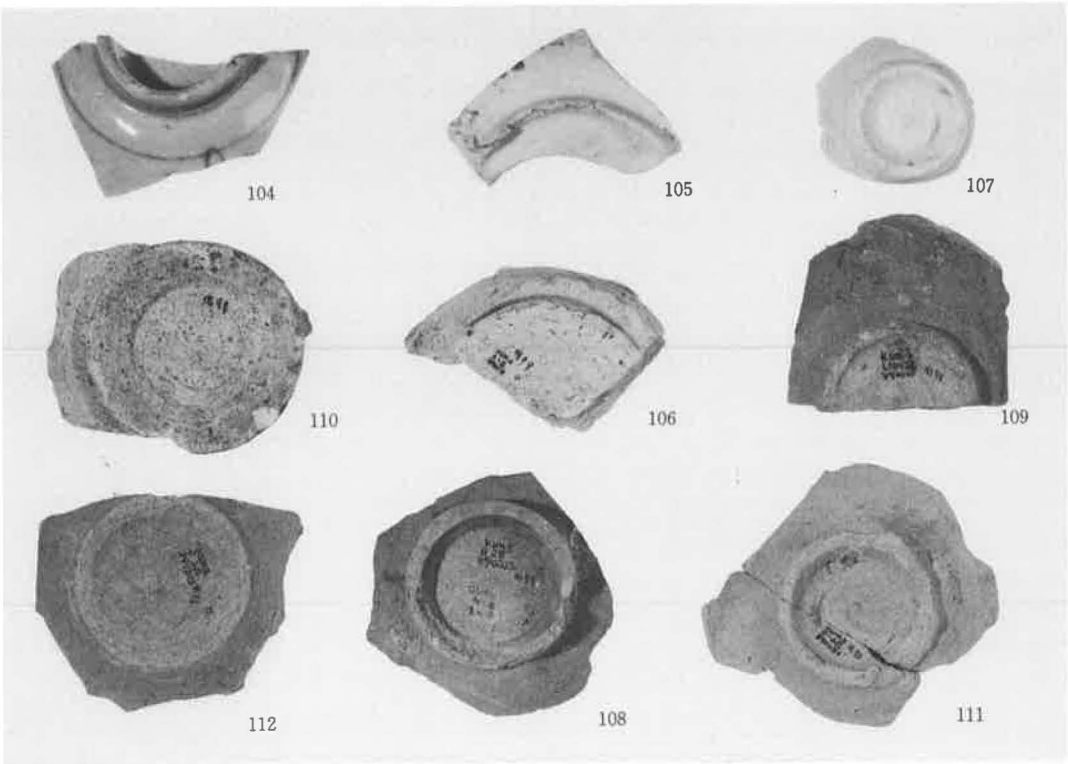
1．瓦器・土師器



2．瓦器

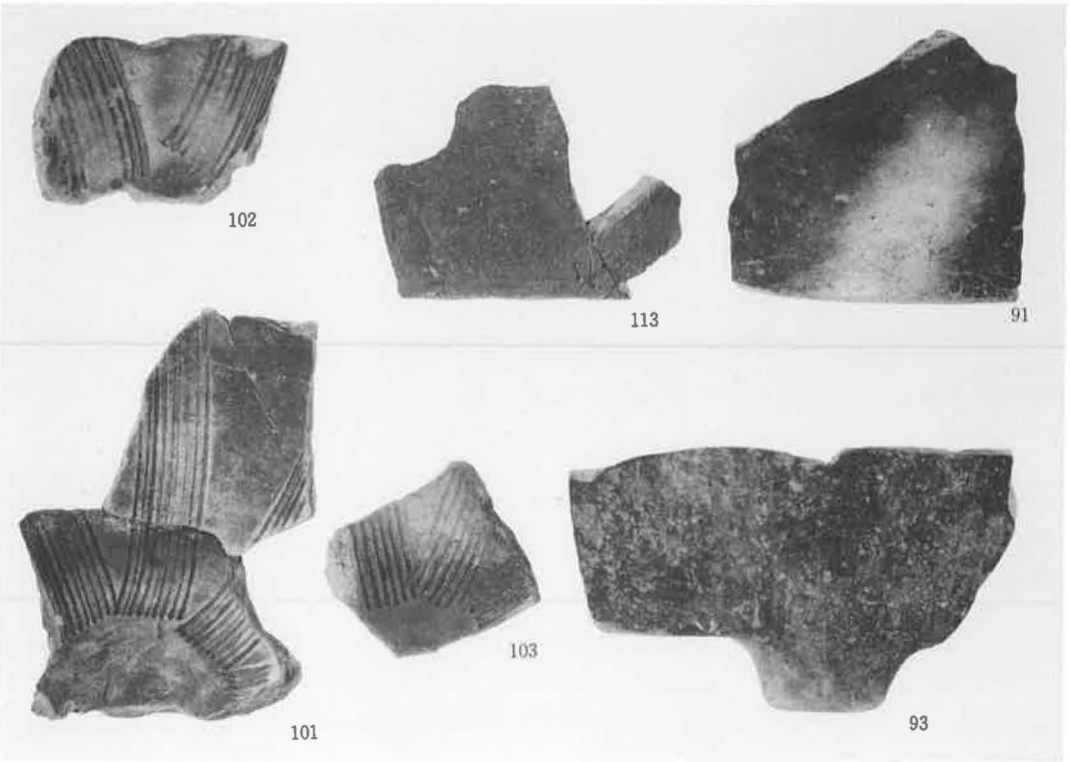


1．土師器・輸入磁器・陶磁器

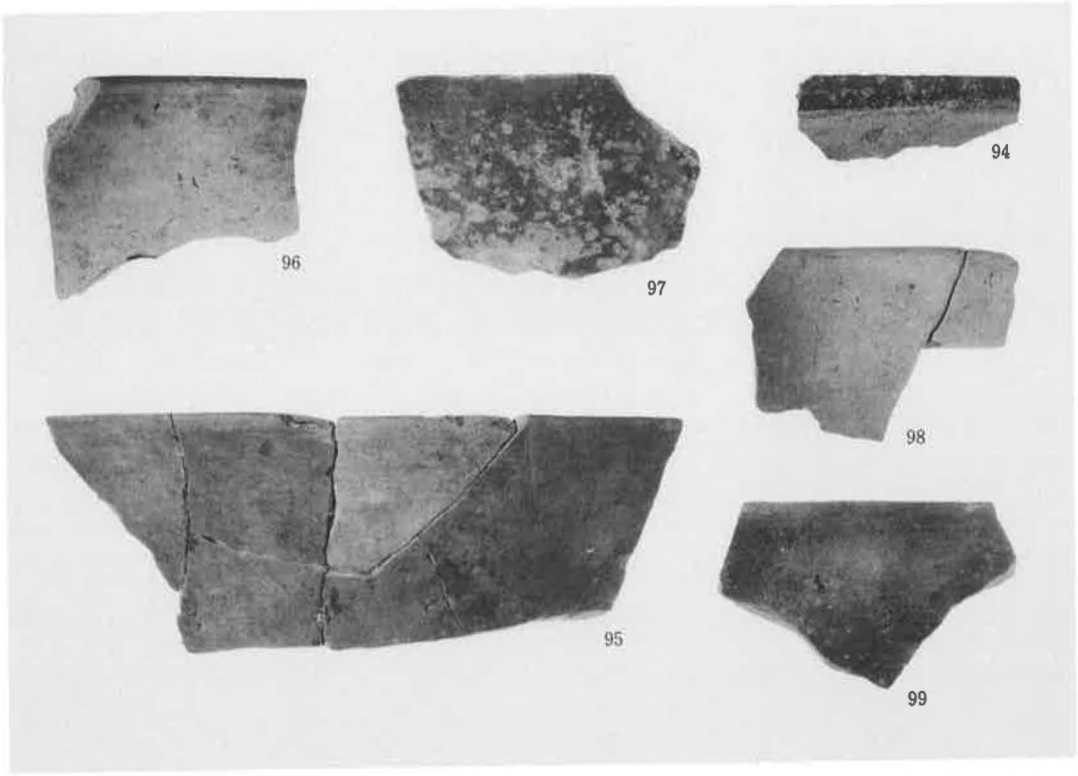


2．陶磁器

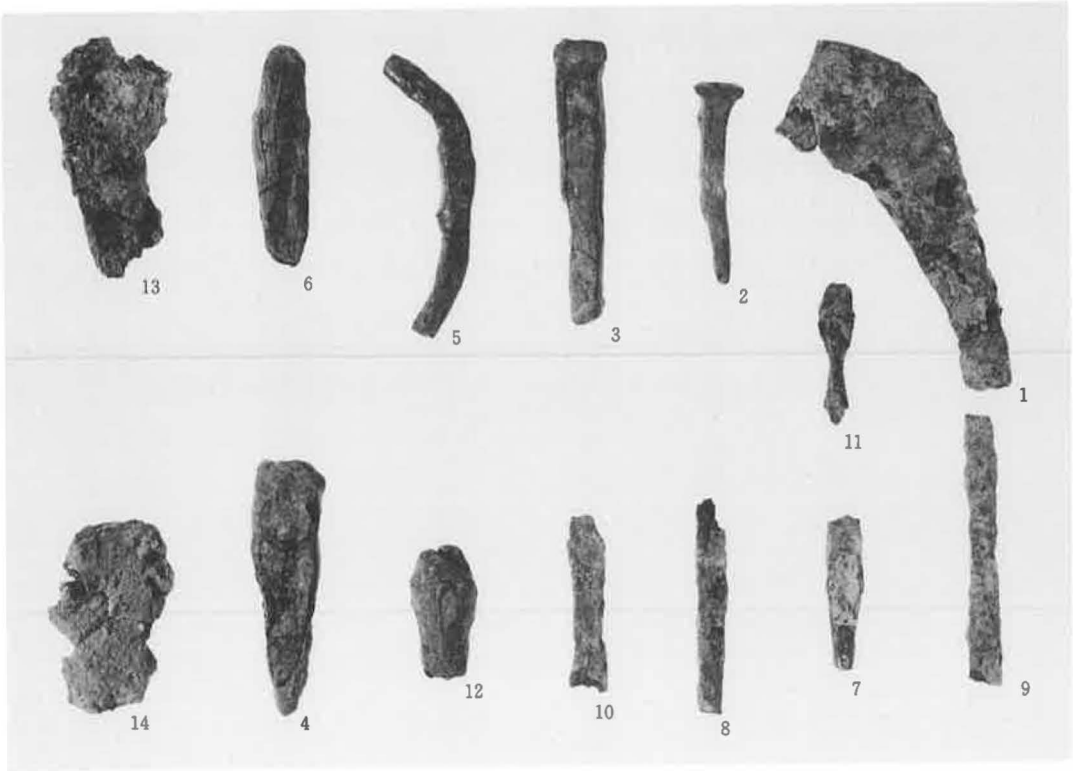
1．瓦器



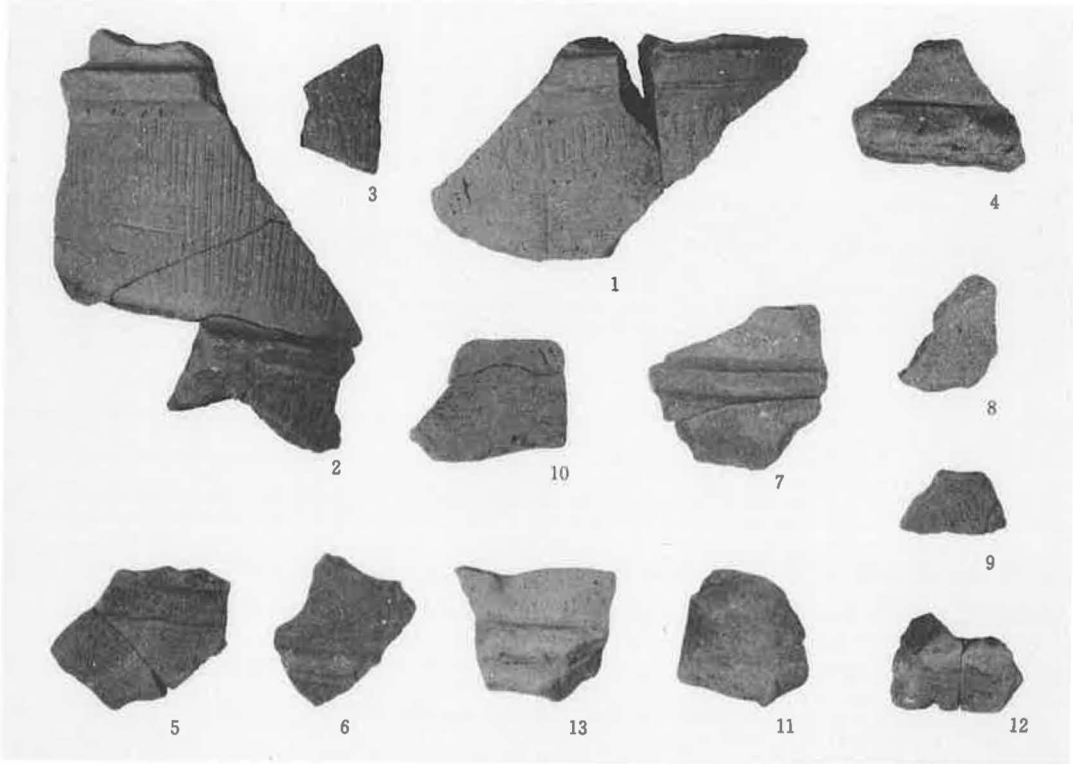
2．瓦器・陶磁器



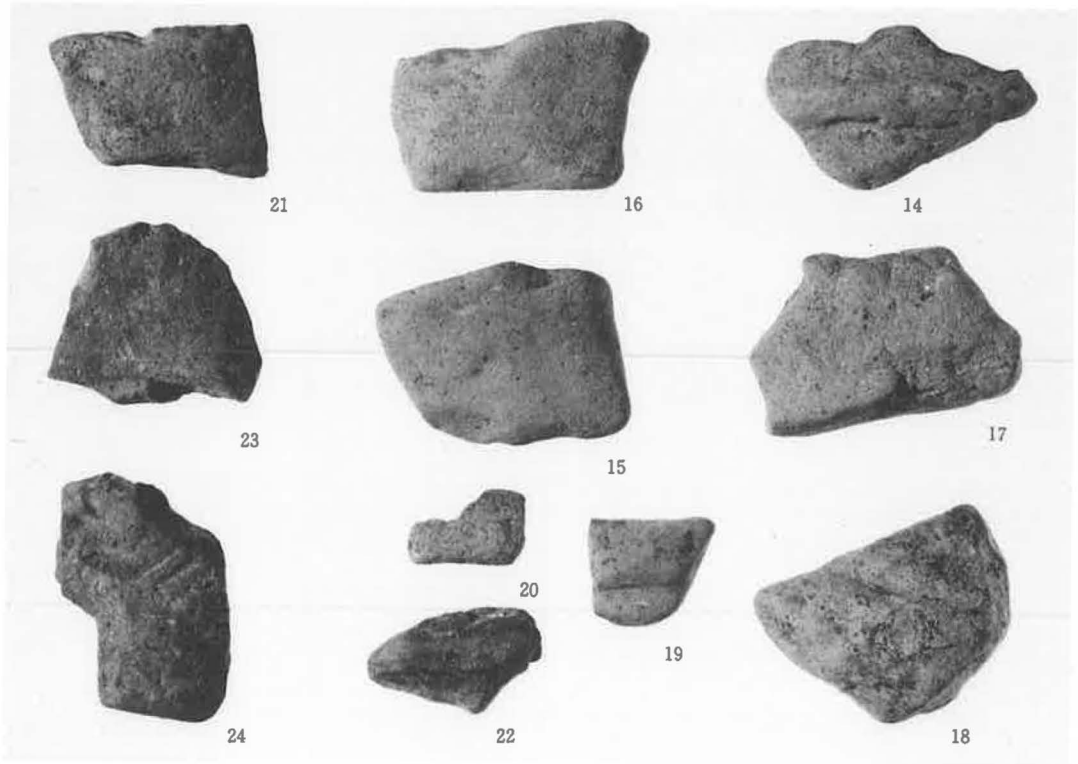
1．瓦器・須恵器



2．金属製品



1．埴輪



2．埴輪